柳川雅話

麻生路郎★主宰

海軍慰問號

五月號

Pensoj flugas trans la land-limon

兵隊さんありがとう

川柳雜誌・五月號目次

表紙（我克）……岩崎柳路
Z旗……（一）
漫筆 銃後の匂ひ……麻生路郎……（二）
小石を集めて……西川青美……（三）
草木徒然……西田蜻樂……（六）
武玉川研究（三〇）……梅本鹿山……（四）
隨筆 丹波の俳句語る……森東魚……（四）
川柳の近畿 大和篇（一〇）……麻生路郎……（一三）
海軍慰問句會……（一一）
國策……安川久留美……（一二）
語源覺書（五）……淺田一……（一三）
街に住めば……高橋かほる……（一四）
ボルネヲ通信……大森風來子……（九）
市電風景……丸尾潮花……（一一）
陣中川柳……紅ン坊……（五）
比島柳信……蛯野嘉代松……（七）
大東亞ない〜づくし……夷一笑……（七）
雜記帖……福田妄夢……（一〇）
南方動物川柳會……（一二）
不朽洞句抄……麻生路郎……（一）
近作柳樽……麻生路郎選……（一六）
川柳塔……麻生路郎選……（八）
同舟近詠……諸家……（一三）
一路集
大陸……大島蕭明選……（一八）
旅館……岩崎柳路選……（一八）
目薬……吉田水車選……（一九）
各地柳壇
川協・柳界展望……（一二）
川柳類題索引……（一四）
川柳書架……（八）
廻轉椅子……（一二）
社關係の人々……（一八）

★

Z旗

飜せZ旗・一億の胸に—と、或る新聞の見出しに書かれてあつたが、そのZ旗とは一體どんな旗か。起源はいつか。旗の持つ意義は？世界中何處の國でも用ひてゐるのか。寸法は？色彩は？と、疊みかけて訊かれたら、その道の人でない限りはハツキリした答は出來ないのではあるまいか。從つて、飜せZ旗・一億の胸に—と云はれても、トント飜しやうのない人がゐるのではあるまいか。お前はどうだと訊かれたら何んだか判つてゐるやうでもあり、判つてゐないやうでもある。そのくせZ旗、Z旗と幾度か新聞紙上で讀ませられてゐるので、幾らかは判つてゐるやうな氣もするといふ程度である。從つて人から說明を求められたとしても確答は出來ない。某氏にこれを質したら、Zはアルハベットの一番おしまひだから、最後通牒を意味するのではないでせうか。東郷さんも使はれたし、眞珠灣でも使つたといふから——といふ答であつた。某氏に訊いたら樞軸國の旗印と違うのですかといふ。これは又すつかり見當違ひの答だ。ZとナチスのZ旗とがこの人の頭の中で交錯してゐたのであらう。

最後に、海軍人事部の門を叩いた。ところが××海軍中尉は「Z旗」の本があつた筈だが——と、部下に命じて「Z旗一旒」といふ本を探し出し、「これでも見て下さい」と、手渡された。目次を繰つたら、「Z旗一旒」といふ項目がある。あることはあるが、Z旗に關する詳細な解說ではない。次に拔萃して參考に資することとせう。

Z旗!!

三十六年前を回想せよ。激浪さかまく日本海上、東郷司令長官の旗艦三笠檣上に飜つたZ信號は、そも如何なる信念を物語り、如何なる決意を示したものであつたか。

「皇國の興廢此の一戰にあり、各員一層奮勵努力せよ」

このZ信號即ちこの號令は、今や我等の頭上に飜つてゐる。まことに皇國の興廢は今日にあり、皇國の興廢は太平洋にありだ。全國民は眞に一億一心となつて、此のZ一旒の下に集まり、今こそ全心全力を注ぐ秋である。

光輝ある第卅六回の海軍記念日を迎へるに當り、敢て聲を大にして全國民の奮起と覺悟を要請する所以である。

本書は一昨年の海軍記念日を前にして刊行されたものらしい。至極簡單ではあるが、この一文でZ旗とは信號旗の一名稱であることが明らかにされた譯である。これでZ旗の正體が掴めた。從來我々はZ旗そのものが、皇國の興廢云々の信號であるといふ考へを持たず、皇國の興廢云々は東郷司令長官の口から直接迸り出たものと早合點をしてゐたのである。Z信號必ずしも「皇國の興廢此の一戰にあり」云々に限られた譯でなく、東郷司令長官の時のZ信號に、その大文字があてはめられてゐたのであることを知つた。大東亞戰に於ても、このZ信號を用ひてゐる艦隊もあり、用ひてゐない艦隊もあるらしい。

これだけのことを知つて「飜せZ旗・一億の胸に」を實踐の段階にまで押し進めることとした。

不朽洞句抄

麻生路郎

徵用工會ては朝寢坊たりし
生々庵氏に

日本は强し三男樣が出來
醫博の子見本のやうに育てられ

藥石効なく兵隊さんとして終り
長野林次郎君の英靈に

令息を喪へる長野氏夫妻に
その話避けても淋びし一七日

漫筆

銃後の匂ひ

—戰線の兵隊さんへ贈る—

麻生路郎

（一七）四月十八日

今や空襲必至の狀勢下にある。といふので男は卷脚絆、女はモンペイ外食は濱鹿、家は明けるな、不急の旅はするなと、大政翼賛會の大阪府市支部では聲を嗄らして絶叫してゐる。なんと世話のやけることではある。しかし大半は從順だ。そしていつお客樣が來てもまごつくやうなことはない。

（一八）擧手の禮

私は自分でも可笑しいほどの軍痴である。×海軍工廠に勤めてゐる息子から、陸軍の擧手の禮と海軍の擧手の禮の仕方が違つてゐることを聞かされて、今更のやうに驚いたのである。

陸軍は斯うしてと、ひぢを水平線の高さまでもつて來て擧手の禮をして見せる。ところが海軍は斯うだと、ひぢを四十五度の角度にちぢめて擧手の禮をして見せた。艦内生活ではすべて面積が問題になるので擧手の禮にまで考慮が拂はれてゐるのである。

これは私が軍痴であることのホンの一例に過ぎない。ボチ〳〵勉强するとしよう。

（一九）こども隣組

奥の六疊で、こども隣組の常會がはじまつてゐる。大人がすると、こどもがする。こどもたちは大人のすることはなんでもする。大人が闇をすると、こどもたちも嘘で闇をするだらう。

うちの姉娘が、今日の常會の世話係をしてゐる。座布團を並べたり、お茶を運んだり、手製のお菓子を作つたり、玄關に脱ぎ散らした小さな可愛い下駄を並べたり、何かと忙しくしてゐる。姉娘のゐないところでは、おッ母さんが、それを擔當させられてゐるらしい。

「ねえちやん、お茶を頂戴」といふ女の子の聲がする。

暫く音がしないと思うと、組長が何か云つてゐる。

組長が、引越すので、後任組長の選擧をやつてゐるらしい。

朗らかに、こども隣組の唄の合唱がはじまる。雜談がはじまる。賑やかなこつた。

世話係が一枚の紙片を手にしておだいどこへ戻つて來る。こんなものを刷つてゐるんですよと見せて戻れる。こども隣組の世界にも選擧が出てゐるらしい。今日の常會の刷物は運動會の順序と農園當番に關する特別號なのである。昭和十八年四月二十九日綴行隣組印刷部谷一郎、麻生一歩とある。謄寫版は谷さんがお母さんに買つてもらやはつたんやとは世話係の說明である。勞力にお眠ひがないだけにスッカリ本式である。一寸記錄して見やう。

段錬大會

春だ！春だ！！

だが今年の春はこれ迄のやうな池糖春草の夢をむさぼる爲の春ではないのだ。きたへよ體を吾が愛する體を！！我等子供隣組員は第二の國民と

小石を集めて

—旅の話（二）—

西川青美

フランス革命の時ある橋の瓦斯燈が割れた。その破片を保存して其時の記念に殘してゐると誰かの書物で讀んだ。以來私は石の蒐集をしてゐる。魂なき小さな石ではあるが幾千年の歴史を語るものもあり、青毛布に思出深いものもある。

トルコ王國を見物した時歩道に敷きつめた丸い小石を一つ拾つて來た。サルタン華やかなりし頃、黄金の靴で歩いたであらう、又黑いベールの官女に素足でふまれたであらう可愛い石である。ギリシヤのパルテノン見物の時、丘の上はこれみな大理石の殿堂である。壞れ落ちた大理石の建物の破片は一隅に堆く數列に竝べてある。小さな一塊を拾ふべくその中へ這入つて行つた。二千年の昔の遺物であるなるべく彫りの入つた石を選つて探して居たら番人に見つけられた。入口に禁札がかゝつてあつたのであらうが、殿堂に氣を呑まれて氣がつかなかつた。すご〳〵出て行つたが既に一個はズボンのポケットに入れてあつた。

イタリのベスラビオス火山は二千年前にポムペイを灰に埋めて今尙盛に噴煙してゐる熔岩は泥層の如く山頂に横つてゐる。時々眞赤な熔岩と共に眞白な硫黄煙が噴出する。紡績工場のやうな音が耳を聾する。熔岩を石で叩き割つて持歸つた。今尙その當時の凄さとぬく味を感じる。ローマのカラカラ浴場の大理石の一片はその昔美女の肌に觸れたであらう。眞白な美くしい石である。ローマの道は世界に通ずと言はれた街——の鋪裝道路は黑味の正四角の切り石を敷きつめたローマ兵の馬蹄に音を立てたであらうその石をかいで持歸つた。

サラセン藝術の極致と云はれて今尙ほめたゝへられてゐるスペインのダラナダの舊跡サルタン王榮華の跡、モザクの床石を一個貰つて歸つた。卵のやうな柔らかい小石を紫色に塗つてある。目の細かい臙石の如き石である。白哲のスペイン女が裸體のまゝで踊らされたであらう姿が髣髴する。

ノールウエーはフイヨールド（氷河の跡）の國、幾萬年融けぬ大氷原は今尙山脈と山脈との間に横はつてゐる。天地鳴動してこの大フイヨールドが出來た時斷ち壞された岩の一片、胡麻鹽を思はす白黑の斑點に雲母や、金色の粉石を混ぜたもの、萬丈の岩山に挾まれた川岸に立つて千古の雪山を倒影して滿々とたゝえた水面に電車も汽車も聞えぬ閑寂境を思出す。

エヂプトの人面獸身像はアラバスターの大彫刻、紀元前二千年即ち四千年前に建てられたものといふ世界文明の發祥地と言はれるだけに、藝術味豐かな、眞に迫る彫刻である。人面獸身の像ミイラの出來る程空氣が乾燥してゐるためか苔もなく朽ちもせず白哲の軀をゆつたりと椰子林に横たへて星の奇麗なエヂプトの空を眺めてゐる。この一片の石は四千年の昔に名工の手に觸れたもの、勿體なくも尊い氣がする。砂漠の砂が自然に固まる砂石層の一塊と共に大切に保存してゐる。

して我が大日本帝國の國民として頭も體もねり上げて壯健な赤子とならねばならないのだ。この時に當つて當隣組運動班では國防國家段錬大會を開催いたします。

何卒皆様も御協力願ひます。

順序

國民儀禮

君が代奉唱

子供隣組合唱

1、第三ラジオ體操
2、三十米走（小）
3、六十米走（中）
4、百二十米走（大）
5、繩飛び競爭（女中大）
6、盲競走（男）
7、一周走（男女）
8、長距離（男女）
9、注間競走（小中）
10、協同（男女）

賞品授與

散水當番

月　田中　久井
火　松下　山中小
水　谷　酢谷
木　山中中　田中
金　田中　松下
土　谷　山中
日　全員

鍛錬の鍛が段になつてゐたり、池塘の塘が糖になつてゐたり、撒水の撒が散になつてゐたり、誤字だらけであることも、大人の隣組そつくりだ。ようもまあ、眞似したものだ。こんなのを、せんだんは二葉よりかんばしといふのだらう。

仕事に忙しい自分はうちの休閑地が、いつの間にやら、こども隣組の農園に應徴させられてゐたことを、近ごろになつてはじめて知つたのである。撒水當番が一々ベルを押して注水に來てゐた努力が、豌豆に、はじき豆、とうもろこしに蕎等々々、いろんなものが、大人の作つてゐるそれよりも遙かに優秀な成績を見せてゐる。

この隣組には黑板もある。回覽板もある。農園用具もある。そして多くの時間も持合はしてゐる。子供隣組の唄をつくり、作曲をして貰ひ、ピヤノや蓄音機まで利用してゐる。そして、すべて實踐である。鍛錬大會も大人のやうに、乘物に乘つて出かけたりしないで靜かな自分等の街で開催するのである。隣組員が引越しをすると聞けば、送別會を開いて名殘りを惜しむ。餞別も送るといふやり方だ。斯くしてこども隣組は大人の隣組に對して何物かを敎へてゐるやうである。

（二〇）モンペと女性心理

モンペ百態。何處まで行つても女は女である。女性心理の動き方を知らずに、一列一態をのぞむことは木によつて魚を求むるよりも難しいことだ。一等滑稽なのは紋付のモンペ姿やモンペ姿の上に、ちよこなんとお太鼓を結んでゐるのを見掛けることである。若い娘は股の切れの深いズボン式なのを好むやうだ。ズボンをはいた娘もある。ズカガールの影響かも知れない。

語源覺書（五）

淺田　一

感謝の表現、我國の「ありがたう」は「得難い—減多に無いことだ」の意味である。それを得たことに對する感謝の表現とした。英語 thank 獨語及蘭語 danke は共に「思ふ」think' denken といふ語から來てゐる。「忘れずに覺えてゐる」の意である。佛語「メルシー」は慈悲、伊語「グラチエ」は恩惠を意味し、葡語「オブリガード」は「義務附けられてゐる」の意である。露語「ブラガダリユー」は「有益である」同じく少し下卑な語「スパスイーバ」は「救はれた」の意。「ルーマニア語」で「ムルトゥーミ」は「多く」の意で大阪邊で「オホキニ」といふに似てゐる。「スペイン」語「レメルシアール」は佛語メルシーと同樣である。丁抹、那威で「タツケ」、瑞典で「タツカ」「フインランド」で「キイツテー」「ボヘミヤ」の「ヂツク」は獨蘭の「ダンケ」の轉呼でないかと思ふ。支那の「謝々」は謝絕の意から來て居り、朝鮮では「カムシヤハムニタ」だから「感謝」の字音から來てゐる「アイヌ」では「ヤイイライゲ」で「自分を殺す」といふ意になる。「マライ」の「テリマカシ」は「愛情を受取る」の意である。感謝の基本觀念が各民族の感謝表現から窺はれる。

唾。昔は單にツと云つた。吐く時の聲でなからうか。之を吐くのをツハクと云ひ後にはツバで唾を意味するに至つたらしい。「ムシヅが走る」といふのは口中に唾が涌いて來るのを云ふ。ムシは虫と同じ語源でタカミムスビノカミなどのムスと同じく發生することを意味する。ツハリは唾が張り出す意である。姙娠の時食慾に異變が起りよくムシヅが走るからである。ツカル（疲）は「唾涸る」であると野崎義太郎先生の「言語學」にある。痰を出すことをタグリといふのもツをくり出すことでないかと思ふが痰の字音から來たといふ說もある。外國の唾といふ語も吐く時の音から來てゐる樣である。英語 spew, 獨語 spucken, speien, sputa ラテン語 spu-ere、ギリシア語 pty-ein 泰語のトムなども擬聲語と思ふ。

點。點といふコトバがカルタと共にスペインから punto といふ名ではいつて來た。之はピユントと讀むのだが、ユが拔け終のトもとれてピンとなり「ピンからキリまで」などいふ樣になつた。キリは「限り」「終り」である。「始から終まで」にあたる。尙寫眞のピントを合はすといふのもこの點といふコトバであつて點がハツキリ見えるやうにするといふ意味である。葡語では點をポントといひ、尖つたものや、洲崎の如きをポンタといふ。京都のポント町は新村博士は洲崎の意だと云つて居られるがそれならポ

ルミナルア錠
痙攣化
中耳炎
扁桃腺炎
敗血症
H

ンタ町といひさうなものである。名妓の名にポンタといふのがあつて以來、よく藝妓の名に今もポンタといふのがあるが之は「先端」といふ意である。最も新らしいといふ心であらう。ポント町に先斗町と書くのは「先」がポンタであつて之だけでさう讀ますのが無理だから斗の字を入れたらしいとの事である。それなら太の字でも入れてポンタ町としたらよささうに思ふ。然しポンタが間違つてポントと呼ぶ樣になりしものであらうか。ロシヤ語では點のことをトーチカといふ。之が特火點と譯されてゐる。

ポントといふ語から英語のポイントや佛語のポアンとなつた。蘭語ではピユント、獨語ではプンクトである。ラテン語はプンクトウスだから獨語はラテン語を忠實に傳へてゐる。所が獨語で少し訛つてプントとなると斑の意である。點々となつてゐるからである。佛語で打消に又…ポアンとするのは一點も違はぬといふ原意だつたらしい。獨語でピユンクトリツヒとか英語でパンクチュアリーといふのは「嚴密に」の意である。

賢、悟、知。「かしこい」といふコトバは古いがどうも語源がハツキリせぬ。松岡靜雄氏の新編古語辭典に依るとカは顯、シコは莊嚴の意だといふ。松岡氏は朝鮮語で「莊嚴ナル」「意氣昂ル」の意味のコトバの語根シクと同源であるといふ。シコの御楯といふ時のシコも「勇猛」とか「意氣昂レル」の意味で醜のこの意味である。之が賢の意味にも轉じ用ひられたことは書紀に知謀英才にカシコキの訓がある所を見るとやはり大昔からである。賢明でなければカシコムことが出來ぬからであらう。カは屢々ハに轉音する。ハシコイとかスバシコイとかいふのも同語源だと思ふ。

街に住めば

高橋かほる

先日四ツ橋の畔にあります國旗揭揚臺に國旗揭揚されるのに隣組から集まつた時の話ですが最初に國民儀禮を行ひ次に指揮者が「皆さんの鄕土の方向に默禱願ひます」との指揮の下に鄕土より大阪へ〳〵と來てはる人ばかりで東に西に南に北にとそれ〴〵の方向におじぎをされましたが大阪生れの私は大阪の東西南北が大阪であり鄕土ですさかい何所の方にも向きなほらずにじつと其儘居たので一寸てれました……

意でない。イカメシイ顏附をするのがシカムで、その顏附で、他に對し發言するのがシカルで何れもシコの轉である。と松岡氏はいふ。兎に角此コトバはカシコムとかアナカシコとか、カシコクモとかいふ風に恐惶畏怖することに用ひられる。手紙の終にアラ〳〵カシコとか可祝とか書くのも

サカシキは識の音の轉呼だと松岡氏はいふ。コザカシイとかサカシラとかもサカシイから來て居ることは云ふ迄もない。或は賢がつて居る者は人に逆らふからサカシといふコトバが出來たのかも知れぬ。

サトス(諭す)サトル(悟)は察の音から來てゐると松岡氏はいふ。一方トは「尖る」「鋭い」などを意味し、「砥石」、「磨ぐ」ともなると松岡氏はいふが、此のトから敏(トシ)となり、之に接頭語サ(早)がついてサトシとなり、他動詞としては諭す、自動詞としては悟るとなつたものではないかと思ふ。此トはトゲともなり、針葉樹栂(トガ)ともなり、ツに轉じては「突く」ともなり、タに轉じて「斷つ」ともなり、「斷ち切る」から「チギル」といふコトバが、生れたのでないかと思ふ。又「早い」ことも「疾し」といふから「敏」のトシは之とも關聯してゐるかも知れぬ。

南風はハヤで早い所から「早い」といふコトバが生れハヤトともなり、スバヤシといふとやはり敏捷を意味する。

知は音チだが朝鮮語でシであつて我國の「シル」は之と同原であると松岡氏は云ふ。之は古いコトバだが、我祖先は大陸や南方と海流海風の關係で可なり頻繁なる交通があり、其單語も我國に用ひられてゐたことは否めない。記紀萬葉のコトバも字音から解せぬとわからぬのが少くない。シルはシラスとかシロシメスとかいふ統御の意味に盛に用ひられてあるがやはり天皇が下意にも精通し給ふことで御知りになることなのである。

歐洲語ではギリシアのgnosがラテンにも傳はり、英語のknowとなり獨語のkennenとなり、之はcan, Können と轉じ、知ればこそ出來るといふ道理を示し之よりドイツ語ではクンスト(技術)だのクンデ(學問)だのといふコトバも生れ、人名としてもクーノーとかコンラード(の前半)とかになつてゐる。他方ラテン語のvidere見るといふコトバから獨語wissen知るといふコトバが生れ、ヴイツセンシャフト(科學、學問)だの、ヴイス(英語のワイズ)即「賢明なる」だの、ヴイゼン(知らしめる、示す)だのといふコトバが出來てゐる。

賢の字音なども前記ドイツ語ケンネンの樣にギリシア、梵語を經てケンとなつて傳はつたのかも知れない。

隨筆

丹波の餅を語る(六)

小山 文三

○

陰曆三月十一日にはコトと稱する行事がある。近鄕では

十七日に執り行ふ所もある。コトと云ふのは春の事初めに神に餅を供へる一種の祭事であらうか、此コトの日には小豆餅即ち牡丹餅を搗いて家に祭つてある神棚を初め竈の神厩の神、厠の神、臼の神などに供へ祭るのであるが此日に限つて柳の小枝の表皮を剝いて作つた白い箸を附けて供へるのみならず、家の者全員が此柳の白箸を使つて牡丹餅を食ふのである。恰も冬籠りからさめて漸く柳の芽の萠へ出でんとする頃暖かい春の日永を迎へ、精力に滿ちた柳の枝の生々とした箸を以ていやが上にも食慾をそゝりつゝ小豆餅を食ふのは春の味覺の思ひ出である。そして此柳の箸は神様のもの、佛様のもの、家族のもの、それ〴〵一纏めに白い紙に卷いて更に之を藁縄を以て二ケ所に連ねて縛り之れを軒下に吊るして永く保存する習慣があつて筆者幼少の頃には我生家にも六十年以前からの此コト箸が軒に並んで吊るしてあつたのを記憶するが今は次ぎ〳〵に腐れ落ちて昔を偲ぶよすがもないのを遺憾とする。

○

釋尊降誕の四月八日には村のお寺に花祭があつて子供達は寺へ甘茶を貰ひに來るが家では小豆團子を作つて佛に供へたり、近隣や出入の者に大きな重箱に詰めて互に贈答するのである。「花より團子」の諺は廣く人口に膾炙してゐるが更に丹波では「花の下より鼻の下」と云ふ諺もあつてお寺參りもさる事ながら先づ以て舌の味覺の忘れられず晝食の小豆餅を抱腹喰つてから蓮華草で飾つたお寺のお釋迦さんに參るのであつた。

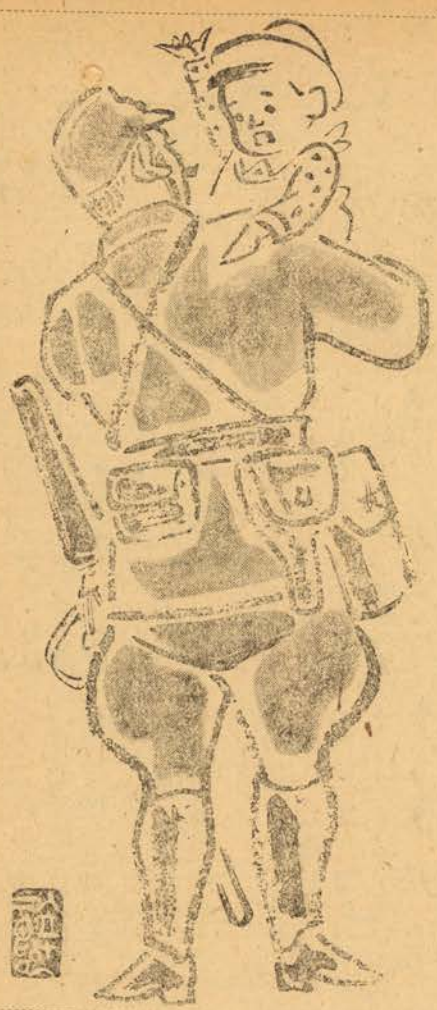
話は前後するが釋尊寂滅の二月十五日には涅槃の佛餉と言つてお寺から一握りの米を集めに來る。そして此集つた米を碾いて米の粉を作り之を丸い小さい團子にして大佛壇に供へ、寺參りの集つた潮時を見計つて住持さんが此團子を寺の門先へ撒くのである。參詣の善男善女は素より子供達は爭つて之を拾つて歸るのであつたが其團子が家々で作つて食べるものよりも遙に小さいので之を涅槃の鼻糞團子と呼んで居るのは面白い。

四月の彼岸には彼岸團子を作るのは何處も同じであらう丹波では春秋の彼岸は各一週間に渉つて佛事供養をするのであるから此間殆んど毎日團子を供へたり食つたりする。自然白い團子に砂糖を掛けたのや、黄ナ粉をまぶしたのや或は醤油の附け燒きにしたり味噌汁に入れたりして樣々の團子の食べ方に主婦の苦心が拂はれるのである。

春秋の彼岸前後には昔は信心家の報恩觀念からお餅や、赤飯の握り飯の御接待をしたものであつた。即ち澤山の小餅や、赤飯の握り飯を作つて街道筋の人通りの多い處に出て、おせつたいと書いた幟など立てゝ道行く人に誰れ彼れの差別なく饗應したものであつたがこれも今は昔の物語りとなつてしまつて、今日の配給機構からは最早想像するさへ許されなくなつてゐるのである。

○

五月の柏餅や菰の粽は丹波特有のもので、六月には小麥初穗と稱へて氏神さんから家々へ小麥を集めに來て之を以て小麥の物相飯を作つて神に供へ家々では小麥團子を作つたりする。七月に入ると所謂お盆でこれ亦團子や餅を作つて佛に供へるし、八月には所謂土用のはらわた餅で、小豆の牡丹餅を造つて暑氣を拂ひ夏の食慾減退を吹き飛ばして體力錬成に餘念がないのである。九月は氏神の祭禮で餅を搗いたり鯖壽司をつける。十月は亥の子餅即ち新米の牡丹餅を作つて秋の空き腹を滿たすのみならず蠶豆の餡で蕎麥のかい餅を作る。十一月には大根祭と稱する大根の收穫の行事に餅を搗いて先に陳べた大根のオミに煮込んで營養價豐かな溫かい食味を體得す



★陣中川柳

還らない覺悟で抱けば子の笑顔

紅ン坊作
宰二郎畫

大東亞の救血鬼、米英撃滅への聖戰だ。ハリキル赤襷、征け、征け、北へ南へ。
撃ちてし止まむ、撃ちてし止まむ。（路）

る。十二月十三日には煤拂ひの餅を搗いて歳晩の糧とする等、月々の行事と餅に離る可からざる關聯性を持たせて始終餅や團子の生活を忘れないのである。

○

其他に子が生れたのを祝つて餅を搗く、婚禮には熨斗餅を搗いて小さく長四角形に餅を切り之れを紙に包んで水引をかけ結婚式の膳を賑はす習慣があり、此餅を吸物の餅と呼んでゐる。媒酌人に對しては引續き二三年間鏡餅の一ト重ねを送つて感謝の意を表する慣例もある。葬式にも餅を搗いたり、盛り飯を供へたり忌中見舞には餅を贈る。七七忌には四十九個の小餅を搗いて靈を慰める。上棟式には餅を供へたり、餅撒きをして祝ふ事もあり、大正の末期頃迄は此餅搗きの餅の中に十錢白銅貨を搗き入れてあつたりした事もある。嫁の里歸りには餅を持たせてやるのは勿論、入學、入營、還暦、法要、出立、歸省、巡拜等あらゆる冠婚祭葬、祝儀、不祝儀悉く餅の伴はざるは無く、實に丹波人は餅に明け、餅に暮れるの生活を樂んだのであつた。

○

餅を燒くのは一般に火鉢に金網を掛けて燒くのを普通とするが少しく大量に燒くには煎り鍋を用ゐるのである。此煎り鍋と言ふのは蠶豆や豌豆を煎つたりするに使ふ所の鐵製の鍋で普通の鍋の底よりは餘程底が扁平であり、且つ側が非常に淺く出來てゐるのである。此煎り鍋を竈にかけ小餅の七ツ八ツ位を入れて上から木蓋をし、時々鍋蓋をとつて餅の焦け附かない樣に裏返しつゝ燒くのである、そして小豆の牡丹餅や黄ナ粉餅を煎り鍋で燒くには細心の注意を要するのであつて若し下手に燒くと小豆餡や黄ナ粉が先に焦けて終つて折角の味を失ふし、上手に燒くと又とても香氣が出てうまいものである。若し夫れ空き腹の急を要する時ならば長火鉢に火箸を横へて此上で燒くし尙急ぐならば火鉢の火の上にヂカに燒いて時を移さず摘んで食ふのは何處も同じ食ひしんぼうのする事であらう。

○

丹波の山稼ぎの男は山の焚火に、携へた餅を放り込んで晝辨當の代りに食ふのも稀ではないが、兎角焦け過ぎたり灰が密着たりする嫌ひがあつて、これが即ち「山の焚火で焦がした餅は、吹いて、叩いて、廻さにや食へぬ」と云ふ諺のある所以であるが、然し實際荒くれた山仕事の空き腹に此灰燒き餅を食ふ位美味いものはないのであつて、林間に酒を溫めて紅葉を焚くと嘯いた位の詩人では蓋し想像もつかぬであらう。

○

搗き立ての餅を其儘生で食ふのは乙なものである。あんころ餅の溫かいものや、餡入り餅のビタ〳〵したのを摘み食ひする味は恐らく思ひ出すだけでも唾の出る思ひがあらう。餅を其儘煮たり、焚いたりして食ふのは稀れであるが然し固くなつた餅を鍋釜の御飯の上に置いて焚く事もあるし、壽喜燒の鍋の中へ放り込んで煮る事もある。前者は餅を蒸すのであつて蒸し上つた餅にまばらに米飯がくつついたりしてゐるのは風情があるし後者は肉の汁が浸み込んでトロリと溶けそうに柔くなるから格別の味がある。丹波の雜煮も一種の餅の煮き方であり、前に述べた大根のオミに餅を煮込むのも、七草粥や、小正月のあづき粥の中に餅を入れるのも一種の餅の焚き方であらう。しるこ、ぜんざい共にこれ亦餅を煮く一方法である。

○

丹波の兒供は餅の事をバアと呼ぶ。年寄つた主婦やお婆さん達はアモと云つたりゴクウサンと云つたりして餅と云ふよりは遙に上品な言葉だとして居るのである。前者は餡餅の省略語から出た愛稱であらうが餡の入らぬ餅でもアモと呼ぶから尙考證の餘地があらう。後者は神に供へる御供即ちゴクウから出た言葉に相違ないが今では神樣に供へる事は後廻しにして先づ自分の鼻の下を潤すを第一義としてゐるから笑はせられるのである。

○

餅を食ふと腫れ物が治らないとか、眼が惡くなるとか、傷口が段々化膿するとか言ひ傳へられて、丹波の堅氣の御隱居さんなどでは聊警戒する向もないではないが、恰も子供が御飯を澤すと目が潰れるぞと威されると同樣に、必竟美味い餅は往々食ひ過ぎる恐れがあるから此過食を戒めんが爲めに丹波の古老の言ひ遺した箴言かと思はれる。

實に茲三、四十年前の昔の丹波には胃酸過多症が多くて、胸やけがすると言つては重曹を飲み、强飯や餅を食ひ過ぎては食後の重炭酸曹達を缺かさなかつた多くの人々を見受けたものであつた。

筆者の祖母は稀に見る働き手であつたが又至つて餅が好きであつた。齡八十を過ぎてからは全く童心に歸り多くの曾孫を相手に餘生を樂んでゐたが、昔の丹波人の御多分に洩れず少し食ひ過ぎると直ぐ胸やけに惱んで常に鹽氣のあるとろ〳〵昆布などを用意して胃の痛みに備へてゐたのであつたが、不思議な事には好きな餅や團子などは少し食ひ過ぎても、胸やけを訴へなかつたし、夏の下痢の床に就いた時などいくら餅食を續けても容易に治らないのに、たま〳〵老人の切なる所望に抗し難く恐る〳〵牡丹餅を食べさせたところ忽ち下痢が回復した等の僞の樣なほんとうの體驗があるのである。かくて我祖母はお萩や團子や牡丹餅を食ひつゞけて九十四歳の天壽を全うし「長命の餅好き」と云ふ丹波の諺を立派に裏書きして極樂往生を遂げたのであつた。

○

又筆者の母の里方は百姓ながらも其昔は帶刀を許された庄屋であつたが一家揃つて餅好きであつて他家に嫁づかせた數人の子女への產見舞だの外孫の雛祭りだの事毎に缺かさず餅を搗いて送る事を忘れなかつたのみならず里に歸る子女達にはいつでも餅を搗いて食べさせる事を怠らなかつたし、正月の年賀に集ふ事の出來なかつた子女達の爲めには正月の餅を大寒の水漬けにして三月頃までも貯藏して置いて其訪れを待つて之を饗應する程の念の入つた餅の禮讃者であり且つ親心のこもつた人々の集りであつた。

比島柳信

蝶野喜代松

私は〇〇兵團の報道班に屬し比島各地を巡り專ら宣傳宣撫に從事致して居ります。これは其途次に拾つた雜文です。御笑覽賜はれば幸と存じます。

ふと戰線で手にした御誌昨年の七月號中の「頼緣と畫家」と題する文章にあるK畫家は私の中學時代からの親友であり、且つ又今は義兄にも當る關係からなつかしい思ひでの文章を讀ませていたゞきました。

比島ルソン島の中央高原にあるバギオから山中を奥地へ進むこと百六十粁、こゝにボントックといふ町があります。其間所々に分哨があり、これをバギオを起點とする粁數に應じて〇〇粁分哨と言ひ慣らして來ましたが、いつの頃からか〇〇粁分哨は千早城〇〇粁分哨は赤城山と命名されマンカヤンの鑛山には伊豫の國松山城と墨痕淋漓たる木柱が立つてゐるではありませんか。嬉しくなつてしまひました。

◎マンカヤン今伊豫の國
　松山城

皇國の版圖も隨分延びたものです。

◎千早城護る勇士は霜を
　ふむ

こゝ千早城は比島でも最も寒い所とされ、十一月から二月にかけて霜が下ります。時に珍しく雪が降ると戰前にはマニラから雪見の自動車が殺到したといふ。

◎赤城山口笛に乘る子守歌

こゝはマンカヤンへの分岐の要衝です。東海林太郎の子守歌が聞えて參ります。兵の口笛です。

◎前のよりあとのが長い
　イゴロット

ふんどしのたれは前のよりうしろのが幾分長いのが特徴。

◎千仞の奇觀もうこれだ
　けで澤山だ

ボントックより更に奥地へ自動車が進む半歩運轉を誤まざば千仞の谷底これが數十粁も續くのですからいゝ氣持が致しません。

◎こんな所にこんな町が
　と思ふ町

其山奥の山地に青又は赤の極彩色のLといふ相當な町があります。

◎三階まであるカランバ
　ン乳銜ませ

飯をたく爲、又水をくむ爲、比人は一般にカランバンといふ土釜を使用し、頭上にのせて歩行致します。

◎木に登り紙芝居聽く兒
　の眼付き

◎岩壁にピタリと付いた
　板の橋

有名な奈良棧道、開戰當初高砂義勇軍の決死の架橋に成るもの。

◎奈良棧道頭ふせふせ谷
　がみえ

妻であるしるしの文身臍
　をみせ

妻であることに對世的効力を持たせる爲、おはぐろを塗つた日本の昔も思はれます。双乳は固より臍までのぞかせてゐるのも其原色の腰布と不思議な調和を保つて美しい。

◎青空へ梯子梯子が延び
　る松

嘗ての敵の展望哨も今はいたづらに鳥をして其お宿には些か大き過ぎると嘆ぜしめてゐます。

◎比島への遺作は哀れ紙
　芝居

宣撫行も命がけです。先般犧牲者を出しました。文展の新進作家であつた惜しい男。謹んで君の靈を弔ふ。

◎遊ぶ子の年聞いてみる
　おやぢなり

子供の可愛いことはいづこも同じです。習ひ覺えた土民語で先づ年をきいてみる。そして自分の子をいつしか思ひうかべてゐる自分もすでに三人の兒の父親なのです。

（二月十四日）

大東亞ないゝ
づくし

夷一笑

明け行く東亞に闇はない
闇取引はゆるせない
日本刀に曇りはない
いくさに負けたゝめしがない
まけてならないたまらない
銃後になまける者はない
配給制度に不足はない
あの日の感激わすれない
三國同盟揺がない
印度の獨立遠くない
自由の國に搾取ない
盟主日本をうたがわない
ガダルカナルに冬はない
アリューシャンには春がない
スパイの姿にしるしはない
うつかり出來ないしやべれない
敵のデマには根據がない
日本ニュースに嘘はない
蔣介石ではたよりない
ルーズベルトに誠意がない
そこでチャーチル拔目がない
內輪喧嘩はみつともない
ないゝづくしはきりがない

男は
卷脚絆
○
女は
モンペイ
○
外食は遠慮
大阪府・大阪市・大政翼贊會

川柳塔

＝路郎選＝

家柄も云うて居られず喰べに入り　大阪　高橋かほる

人妻の姿筍蕗を提げ

吸物の木の芽をほめる歸還兵　尼崎　奥村丹路

帽子着た儘で玄米試食され

子の天下家は憩ひの場所ならず

ありがたく豊かに春の軸にかへ　張家口　岩崎柳路

チョコ〳〵と歩く子があり敵憎む

一人來る寄席はさびしくなつかしく　四月三日上京車中にて　戸田孤篷

いたづらに句帖は由し富士仰ぐ

勿體なや傷痍軍人禮に來る　大阪府　戸田孤篷

一本のビールでソロモンを論じ　外地に住みて　ペーチカにお手々つないで女立ち

碁敵に碁敵がなしひと七日

先生があわて生徒が亦あわて

「滅私奉公」と云ふ答案に點をつけ

合格發表ライカで撮つて父は去に

卒業生何の話かまだやめず

ホルモンをして來たなどと岳父云ふ

言ふ事をみんな時局に結びつけ　兵庫縣川西町　戸倉普天

手心がなけりや落第するところ　尼崎　水谷鮎美

昆布卷を箸にはさんだまゝ話し

起重機の影にんげんへ太く延び

草の實に愛を感じるほど弱り

母の手のきくなは春の灯にうつり　兵庫縣　西川青美

松江景觀

宍道湖の立て艪に支那をちよと偲び

堀もあるセットにしたい武家屋敷

小泉八雲の舊址は武家屋敷

低い軒八雲額を打つただろ

美保ケ關、關の五本松

行列へ土下座も出來ぬ狹い町

米子

稅金でカフェーとわかるビステキ屋

さう言へば女中がマツチすつたわい

三朝溫泉

裸では男の方がつゝましい

荒木又右衛門の墓

又右衛門一杯のんだ店は何處

★

亡父の日記伜、伜と書いてあり　大阪　福田妄夢

男程仕事が出來て嫁き遲れ

化粧せぬ娘ありけり教師の子

詩集讀む給仕の化粧目立つてき

大叔父死す

八十の齡へ靜かにコンマ打ち

團欒の味も知らずに妾の子　大阪　橋詰東雀

職長の眼鏡鍍金がはげて居り

十姉妹の様に乳房へ探すなり

川柳書架 (86)

陣中川柳

麻生路郎編

▼本句集は支那事變及び大東亞戰爭に出征した柳人の戰線名句集とでもいふべきものである。皇軍慰問のため編纂されたものである。

▼左に目次を列擧する。

出發・船内生活、敵前上陸・進軍・クリーク、戰鬪・空襲、入城・占領、歩哨線、露營、軍馬、戰線、慰問文、慰問袋、宣撫、戰友、汗と兵隊、煙草と兵隊、雜

▼昭和十八年二月二十八日發行、B列6號版、一〇一頁、定價三十五錢、送料十錢、發行所大阪市西區江戸堀南通二丁目一三興亞書房

父百句

小田夢路作

▼著者が亡父の追悼句を一冊としたもの。

▼昭和十八年四月一日發行、A列六號版、非賣品、編者發行者大阪市福島區玉川町四丁目九七小田夢路。

大地の響き

川柳雜誌社出雲支部大地吟社編

▼川柳雜誌社出雲支部(舊猴川支部)の滿十五周年の記念句會の記錄である。

▼昭和十八年三月三十一日發行、A列五號版謄寫二〇頁、非賣品、出雲市高松町松害下大地吟社發行

東亞川柳句集

▼滿洲及び北支に於ける百二十一作家の自選十句集である。卷頭に、東

天才と云はれて露路の奥に居り
　　名古屋　吉田水車

國國感想
久々の沼津あたりは雪もよひ
氣兼な程衣料切符の用が出來
ビヤホール俵藤太も驚かん
　　ハイラル　宮岡白峯

唱呼第二次特別攻撃隊
戰友の誓ひを果たす月明り
擧手の禮東の空も櫻色
賞狀へ釦をかけて閣下立ち
消燈へ軍刀さげる用が出來
　　大阪　北川春巣

山陰・出張
税のいる方の玩具を子は選び
白魚が獲れます湖の景をほめ
　　松本　石曾根民郎

鳥取砂丘
砂丘から大聲出して見たくなり
日本の子おのれの子なり育ちゆけ
勝つまでの明日へ寢る身をいたはりて
箸二本わが家に足りて銃後とす
　　大阪　丸尾潮花

世にあはぬまゝなる君の死を悼む
嫁ぐ日の髪で怨みを言ひにくる
すき髪のまんま全快禮にくる
人員整理親方さんは氣儘すぎ
愛嬌を忘れた顔が母に似る
　　大阪　尾崎方正

小野勝氏の一周忌に詣て
南天へ宵の雨降る佛の日
黑襟のおかみがさばく隣組
硝子體の周邊で讀む老を知り
押す人へ席を讓つてやる餘裕
　　下関　櫻川不水

孑孑の威勢をねたむ病み上り
銀狐令孃に似て悲しけれ
嫁さんなぞに化けて小狐笑はせる
美人なら狐でもよい春の宵
萬歳と云ふ恰好で蟹は逃げ
蹂躙も何かは堇咲いて見せ
新聞紙芝生に白ふ暮れ殘り
　　大阪　菊澤小松園

愛されて居ますと實家へ嘘を書き
退却の時だけ敵兵氣が揃ひ
馬の目に水槽自分の水に見え
　　大阪　中内翠芳

船と陸怒鳴合つてる好い日和
通知簿は大きな聲で歸つて來
馬車馬の停めた電車の多いこと
決戰下だのに櫻は眞つさかり
　　大阪　夷一笑

年よりに日和をきいて出る五月
筍の生毛が春の日に光り
そろばんを持たして見れば阿呆でなし
アートさんへ
別れ際サイン手帖を差出され
白紙令莞爾と立つた若さなり
兩親と多忙な事務を置て征き
　　大牟田　高田抱逸

狂女さへ巡査は恐いものと知り
鶏三羽九人家族に追はれてる
ともすれば食ひ込む時に女專パス
　　下関　國弘半休

遺兒一人母一人擊ちてしやまん
餞別を皆んな献金して征つた

亞川柳聯盟會長大島藩明氏の「句集刊行に當りて」の序（昭和十八年二月十一日附）小池蛇太郎氏の「序」及び奥村唯然氏の「序に代へて」があべばかりで奥附がない。B列六號二四三頁。

ポルネオ通信

大森鳳來子

銃後へ感謝

「日本は何故ボルネオへ日用品やその他衣類を送つてくれないのだらう」とは上流家庭の支那婦人が僕にもらした言葉だつた。

大東亞戰に日本が大勝利をかち得たことを心から喜び今までの歐米思想を捨てて百八十度の轉換とともに親日的な態度になつてもかうした戰爭觀を持つてゐる現住民が多いのだ。日本の高度戰時態制下を默々と敢闘される皆々樣へまつ感謝せずにはおられません。

★

オモチヤのない子供、泣きやまぬ子をたたいて泣きやませようとする支那の親達・日本の偉大なる母の愛を、ふと想ふ。健全なる日本婦人の南方進出を望む。

風車

子供が衛兵所前の歩哨に頭を下げてオジギをする。

蹋る。また來る。ニコニコ歩哨が答へる。

同じ子供が四五人、また來る。歩哨はなんのことかさつぱとわからぬ。

兵隊が一人風車を持つて兵舎から走つて來る。「さあ進上だ」「カシカシ」（駐カシは進上と同意マレー語）

四、五日前から誰の發案か兵隊が紙で棒の先に風車を作つて、子供に與へた。それがオモチヤのない子供

轉勤　京都府　阿萬々的

前のとこはとつい云うて見る日がつゞく
線路班の眼に遊んでる汽車が行く
笹小さく搖れてものをば思へとか
笑ふにも父母嫁の順がある　尼崎　小林文月

雨中嵯峨清涼寺に住友前家長公の墓に詣づ（二句）

清き雨に先代様と共に濡れ
廊下から先代様に燒香し

四月〇日警戒警報發令さる

警報に楕圓のもあり握り飯　西宮　谷口綠葉

欠伸して忘れた物を思ひ出し
綾湯の歸り地藏に掌を合せ
厚生車やつぱり電車のあとに着き
くつてゆけませぬと辭表ポンと出し
閉店へ女給仕の氣が尖り
人生は蒟蒻に似て面白し
嘘にすることが好きなり女の子
食ひはぐれ同志北風きつてゆき　大阪　武部香林

勝つ日迄つゞけ花街のさびれやう
儀禮章みな新參の人ばかり
町會長の背廣へだれる訓練日
融け込んでゆけばよろしい隣組
隣組年長順に笑ひ出し
仲人は戰鬪帽でよく動き
役人が來て宴會の華々し
胸張れるだけ役人は張つて呑み
配給の筈にえゝしの肥りやう　布施　上田翠光

春姿戰地へ送りたい樣な
敵陣地散らしたくない花が咲き
元旦だ人の心はのぞくまい

夢もなく借家々々を移り住み
やりくりのつかぬ移轉も子等樂し
ストローは青春のなやみを吸ひあげる　京都　明石柳次

轉業の父さんきつちり歸つて來
書籍部へ抱いて來た兒は寢てしまひ
袖カバーアラ、ギを讀む暇がなし
卒業式のその日工場の人となり　堺　村上角堂

巣立す若鷲自爆が希望なり

ビルマ獨立の聲明

バーモ博士大きく「ロッポオ」踏んで去に　尼崎　長谷川三司

過去現在未來守衛は欠伸する
行列へ子が電報を持つて來る
靖國の夫に代りペタル踏む　大阪　野元吐空

第二次特別攻擊隊

あの子は無口でしたと海の母

陸軍記念日

驛名を告げる車掌も卷脚袢　川口　伊古田伊太古

三越の佛壇と云ふマダムなり
五十歳そろ〳〵先に見切りつけ
枕元すし買て來た買て來た
貨車の中馬と兵士の仲のよさ
さてもさて熱海と云へる湯宿あり
子に席を貰ひ度い人前に立ち
賞められて赤い顏した轉業主
冠木門月當番の札があり　西宮　加川泉泡

柳友礎石氏の結婚を祝す

意圖を秘し閣下は唄もうたはせる
悠久のちぎりへ今宵月まるし

を寫ばさずにはおかなかつた。分配にあつからなかつた子供が毎日毎日衛兵所へ來てはオジギをする。

淋しい港街へ俄かにいろとりどりの風車が氾濫。南風の靡く中を。

百聞一見にしかず

大分前のことだが、ルボネオに白人の捕虜を連れて來た。勿論兵隊ばかりである。口笛も高らかに皆軍に引率されて歩く姿は誠に美しいものである。短いコンバスでチョコ〳〵と前頭を歩く日本軍を見て住民は何と心に映したであらう。而しあれ以來、ほんとうに日本が強いといふことを知つた連中があることは事實だ。宣撫のむつかしさが伺はれる。言つて聞かせるよりも先づわれわれが實行しなければならぬ。われわれの一擧手一投足が直に住民に與へる影響を忘れてはならぬ。東京では地下鐵があり二階を電車が走り、またその上三階も電車が走り地上と合せて四段になつて電車が走つてゐるのだと敎へても、眼を白黑させて合點のゆかぬ連中を相手だから……

★

ボルネオでは寒いといふ言葉を使用するが兵隊は暑いといふ言葉を使用しない。若し暑いといふ言葉を使用するなら一日に百べん言ふても言ひ足らぬだらう。それよりも夜になつて雨が降り風がさあつと出て來ると「おゝ寒い」と思はず口から滑べる。その時の爽快さ……。

★

ジャングルとは植物が思ふまゝ我が意を得たりと伸び切つた姿なり。日本婦人の謙讓の美德とは大分違ふ。

★

愛國行進曲……住民が好むの歌詞のよさではない。音曲でもない。日本精神を住民が好むからだ。

兵隊さんありがとう！

本社主催 海軍慰問句會

輝く海軍記念日を前に

★川柳雜誌社では五月五日午後六時から御津八幡宮で海軍慰問句會を開催した。

★開會前からパラ〳〵と降つて來て、いささか出足をくぢかれた觀があつたが作句熱旺盛な柳人にとつて何んの雨位とばかりに、定刻には五十餘名を數へる盛會振り。

★席題互選「手枕」の披講が終つたころには作句道場としての空氣が横溢してゐた。古參新進膝を接しての作句三昧こそは戰時下の底知れぬ餘裕を發揮したものと云へやう。兼題を締切る。その間隙を縫うて紙芝居の幕が切つて落された。演出者は久方ぶりに出席の高鶯亜鈍氏。第一は海に因んで「海底トンネル」、作者は川雜下關支部の多田市多樓氏、繪は同市の藤井米三氏、（下關要塞司令部檢閲濟）、作者市多樓氏が來阪演出の豫定であつたが遽かに病ひの侵すところとなり、亞鈍氏が代つて演出。作畫共に川柳人の手になつたものだけに頗ぶる好評。世界屈指の關門トンネルが如何にして計劃されたか、如何にして實現したか實現すべくいかに多くの資材と人的犧牲が拂はれたかを、この一篇によつて知ることが出來る。續いて「我が家は樂し」といふ川柳的人情味もの、最後に海軍慰問句會にふさはしい「軍神の母」を演出して大喝采。何んだ紙芝居かと思つてゐる人たちすら、軍神の意氣と、その母の慈愛の深さにはホロリとさせられていきを呑んだものである。小柄でつぶりと肥つた亞鈍氏が紙芝居屋のおツさん振りもうれしく、聲に巾もあり、聲帶模寫にちつとも無理がないので、全く玄人はだしの力演だつた。

★次に麻生路郎主幹が登壇。海軍の猛訓練を表象する標語「月月火水木金金」の演題の下に、川柳にあらはれた月月火水木金金の句に就て、その用語法に就て、又その意氣でもつて作句に精進すべきであることを烈々火を吐く得意の熱辯で力說された。

★講演についで兼題「海鷲」（路郎選）の披講、兼題「錨」（鮎美選）、兼題「體當り」（綠雨選）、最後に席題「鯉幟」（潮花選）の披講がありうたた春の夜の短さをかこつ盛會裡に會を閉ぢた。

（一幹事記）

出席者（順不同）

路郎・孤篷・木阿彌・妄夢・東雀・玄同子・登志緒・銃人・幽王・水客・香林・琴光・眞星・綠雨・潮花・朝美利美・惠美須・風柳・雅美・礎石・光洋・茂・三郎・松綠・三葉・春聲・寒浪・夕紫男・拓郎・豆秋・紫香・喜雄綠雨・正美・九一・正坊・三司・鮎美・不二嶺泉・聖司・文雄・亞鈍・久・銀奈子・照二リリ

兼題「海鷲」

海鷲の羽ばたきだけで敵機逃げ
海鷲となる魂も親ゆづり
神となる決意母艦を飛び去りぬ
甲板に立てば海鷲まだ若く
海鷲に捧げて一家悔ゆるなし
海鷲が進みニュースが了るなり
海鷲の一機歸らぬ春の波
海鷲へ輸送船團崩れたち
還らない覺悟母艦を後にする
口笛を吹いて母艦へ左樣なら
船團を海鷲一機守りぬき

兼題「錨」

錨捲く朝あくまでも青い空
投錨へ照空燈は靜かなり
病床の征友に拔錨地の便り
拔錨に故國の山は霞みたり
日本の牡蠣も錨について征く
重責終へ錨を下す兵靜か
南國の月をくだいて錨降り
引き揚げた錨へ蟹の眼が挑み
拔錨の北の守りの陽の靜か
錨卷いて男の悔ひをすてゝ發ち
分取つた錨へ遺兒の瞳のつぶら
御用船うれし錨を降す音
錨まく男の子がうたふ防人歌
女房が錨を下ろす玉江橋
さびてゐる錨に椿の花が咲き
錨々龍宮城へつゞく夢

兼題「體當り」

隊長機見よとばかりの體當り
不可能も可能で通す體當り
指揮官に別れて一機體當り
神さまのすがたと見ゆる體當り
米英の度膽を拔いた體當り

路郎選

寒浪　薪鋭機　思ひもよらぬ體當り
三司　體當り日本人のお茶が冷え
不二　米英の戰術にない體當り
紫香　殉忠の香りも高し體當り
照二　體當り　まさかと思ふ眞珠灣
九一　日の丸を腹に卷いてる體當り
水客　登志緒
利美　鮎美
翠光　香林
亞鈍　光洋
水月　同
鮎美選

文雄　泉泡
潮花　互選
茂　夕紫男
寒浪　紫香
九一　嶺泉
三葉　利美
本阿彌　潮花
三司　幽王
哲水　三司
水客　不二
吐空　銃人
泉泡　夕紫男
夕紫男　豆秋
豆秋　登志緒
登志緒　鮎美
鮎美　紫香
綠雨選

亞鈍　鯉幟り並べて父のまだ若し
正坊　この村に男兒多いぞ鯉幟
紫香　今年こそ母も手傳ふ鯉幟
豆秋　アパートの窓に小さい鯉のぼり
春聲　今日もまた無事な空なり鯉幟
荒驚にまけるものかと鯉幟
弟になる程鯉も小さくなり
鯉幟村は若葉におほはれる
物干へ影が來てゐる鯉のぼり
母だけの手で上げて居る鯉幟
青空へ離してやりたい鯉のぼり
體操の眞上でゆれる鯉のぼり
初まこの幟に夜明けおそすぎる
また一つ增えた隣の鯉のぼり
末の子になつてたてたる鯉幟
鯉幟日本に遠く父子住む
陽あたりの子雀に吹け〳〵鯉幟
（軸）鯉幟うちにもこんな男の子

潮花選

香林　九一
春聲　三司
九一　光洋
雅美　水客
水客　雅美
礎石　光洋
夕紫男　風柳
登志緒　三郎
水客　紫香
鮎美　礎石
潮花　夕紫男

川柳近畿の大和篇（一〇）

麻生路郎

（三）吉野山

★關急電車で終點吉野驛に下車すると山麓に達する。山麓から山上迄架空ケーブルがある。僅かに三分間で登れる。

★吉野の櫻は誰知らぬ者もない。下の千本・中の千本・上の千本・奥の千本などと名づけて見渡す限りが櫻である。花は下が早く上が晩く、凡そ半月位にわたつて見られる。

★しかし、花や紅葉の季節でなくても吉野山は南朝の史蹟として見逃すことの出來ないところである。山上には旅館や料理屋が軒を並べて、史蹟を探ぐる人たちの便をはかつてゐる。

★吉野山と云つても獨立した山ではない。吉野郡の山々の北端の金峰山（きんぷせん）の、それが北向に延び下つた山嘴に名づけた名で、北に吉野川の流れを見下ろして眺めは素派らしい。人家は馬の脊のやうな嶺の兩側に並んでゐるから表から見て平家でも、裏からは二階になつてゐる。

★元來は修驗道の祖である役行者小角（えんのぎょうじゃおづぬ）の開いた山で、凡そ千二百年前のことである。その後次第に發達して南方六里の大峰山（山上山）を奥の院とし、吉野の藏王堂（ざおうどう）を本堂として南北に堂塔僧舍を作つて總稱して金峰山寺と云つた。平安朝時代には京都の公卿が盛んに登山したが中でも法成寺御堂關白道長の登山は豪華版だつたといふことである。その時、子孫繁榮を祈つて山に埋めた金函が以前に發掘されて東京博物館に出てゐる。

★修驗道とは一體どなんものかと云へば、所謂山伏道のことで、もと〳〵佛教の一派で山嶽を崇拜して心身の修練をする者なのである。役の行者が開いてから明治五年まで存續してゐた。當時大峰山の山伏は天下第一の勢力で「吉野大衆」と呼ばれた。源平時代に義經はこの大衆の勢力に頼らうして失敗したので、佐藤忠信の奮闘とか、靜御前の苦心とか、幾多の好話題を遺した。芝居「吉野靜」「二人靜」「信忠」などはこれから仕組まれたのである。

南北朝時代になると、護良親王がこの大衆に頼られて、村上彦四郎父子の忠死といふ事があり、續いて南朝の行宮となつて後醍醐天皇が御劍を按じて崩御になる。楠正行が「返へらじと」の辭世を遺す。それから五百年、別段の物語もないが、關白秀吉の花見の遊は一行五千人、豪華華麗、さきの入道關白と好一對その他西行法師や芭蕉翁、母の伴をした頼山陽などの雅遊を數へるなら際限がない。

★吉野山を詠んだ古川柳では

吉野山十七文字でほめたらず
吉野山なんぞもらつたやうにほめ

吉野山お久振りのやうにほめ

といふ句があるが、何れも貞室の俳句、「これは〳〵とばかり花の吉野山」を皮肉つたものであらう。それに反して

松に目をやすめて通る吉野山

といふ句は眞ツ向から、ほめちぎらずに、花の吉野山を讃美してゐる。

★吉野と云へば櫻、櫻と云へば吉野を想起するほどに有名な吉野の櫻も、自然林ではなく、八田知紀（はったともの）が「よしの山かすみの奥は知らねども見ゆるかぎりは櫻なりけり」と詠じたやうに全山櫻でうづまつたのは藏王權現の威德に歸すべきものである。と云ふ譯は役ノ行者が藏王堂に安置した藏王權現の尊像は櫻の木で刻まれたと傳へられてゐる。そこで櫻を神木として尊重するやうになり藏王權現に參詣する者の間に櫻を献木する風習が發生したのである。登山者は何の某、櫻樹一萬本献木などといふ標石が建つてゐるのに氣付くであらう。同時にこれを保護することとなつたので、次第に空地を埋め、加ふるに變化に富んだ溪谷の形態がこれを助成して、いつしか一目千本の名を恣にするやうになり、丘を越え、谷を分け入つて遂に

市電風景

丸尾潮花

運動時の市電はとても物凄い滿員である。車掌の言ふ事を聞ひて中程へ這入りでもしたら降りる事も出來ない。難波から電車が信濃橋へ着く頃には足が下につかない程につめ込まれてゐた。すると中程から「降りまつせ、次降ろしとくなはれ」と言ふ聲がして間もなく電車は交叉點に止つたが迚も一寸やそつとで降りられない。すると中程から、

「おい降りるせ、皆一寸どいてんか。滿員やさかい足ふむせ。踏まして貰ふてえゝか。どかんと踏むせ、あゝ踏んでもた。又踏むせ。濟まんな」

と一人言を言ひながら降りてしまつた。

「成る程あゝ行くか？」

乘り合した人も足を踏まれた人もクス〳〵と笑つて職人體の男の後姿を見てゐた。

○

市電が北濱を過ぎた頃。一人の青年が母親らしい婦客をかばふ樣にして乘つて來たが、あひにく空席がなく、電車の動搖に婦客は堪へられない樣子だつた。青年は自分の前に座つてゐる、番頭風の男に、

「濟みませんが席をゆづつて戴けまへんか」と頼んでゐる。

「ゆづつてんかて今かけたとこや前から座つてる人に代つて貰ろたらどないや」

「婦客ですので」

「婦客〳〵言ふけれど別に私か君のお母さんの婦をよらせたんでもなし」

「これは〳〵とばかり花の吉野山」になつてしまつたのである。これを裏書する年中行事の一つに、古くから毎年四月十一十二の兩日を花供養と稱へて藏王權現に櫻花を献ずる儀式が盛大に營まれてゐる。

★吉野の名物としては櫻を凌ぐものはないが、紙と葛と漆と山伏の法螺貝と藥の陀羅尼助が知られてゐる。

古川柳に

櫻ちる下に葛桶　うるし桶
御會式の櫻も吉野　紙でする
だら助をのんで靜は癪をさゝ

などの句がある。

★吉野山を詠む。

花に目を奪られ碑などは振り向かず　雅美
吉野山散るてふことを牧へられ　路郎
二階から見れば吉野は花の雲　同
秀吉は吉野を豪華版にする　同
吉野山哀史へ草鞋穿きかへる　同

（三四）吉野神宮

★吉野神宮は吉野神宮前停留所から僅に七町のところにある。坂道ではあるが道路がよいので樂々と登れる。

★御醍醐天皇を奉祀されてある。天皇は御宇多天皇の第二皇子にましまし、御母は談天門院藤原忠子の方で內大臣師繼の息女、正應元年十一月二日御降誕あらせられ御歳三十一歳の時に踐祚あそばされたが、天資英邁の御方であらせられたので、多年朝家を壓迫した北條氏を亡し、我が國體の本義である天皇御親政の實を擧げさせられたのであつたが、百五十年に亘つて培養せられた武家の勢力は容易に刈除することが出來ず足利尊氏がまた反旗を翻したので朝家の御運が逆轉してしまつた。そして御醍醐天皇はやむなく南山に御幸あそばされ孤立無援の行宮に坐すこと四年、しかも京師回收の望みの達し難いのを歎かせながら延元四年八月九日御不豫となり同十五日御位を皇太子義良親王に讓らせられ、翌十六日吉野の行宮に崩じられた。時に寶算五十二。

★吉野神宮御略記によると「天皇崩御に臨みたまひ、只生々世々の妄念ともなるべきは朝敵を悉く亡ぼして四海を泰平ならしめんと思ふばかりなり。玉骨は縱ひ南山の苔に埋むとも魂魄は常に北闕の天を望まん。若し命に背き義を輕んぜば、君も繼體の君に非ず、臣も忠烈の臣にあらじ」と委細に倫言を遺させ給ひて左の御手に法華經を持たせ給ひ、右の御手に三掬の御劍を按じ給ひつゝ、十六夜の月と共に雲がくれさせ給ふ。かくて御斂葬の御儀は御遺勅のまに〳〵御終焉の御形を改めず北面して如意輪堂の東南塔尾山に葬り奉る」と記るされてある。御痛はしい極みで涙なくしては讀めない記事である

★古川柳に

南朝は吉野の花の雲の上

と云ふ句がある。

★支考が「歌書よりも軍書にかなし吉野山」と詠んだ南朝五十七年の哀史は御醍醐天皇の思ひ立たせられた雄圖に端を發し、忠勇義烈の士が多く輩出した。しかも南風競はざる中にあつて敢然として王事に殉じた涙ぐましい事蹟の多くを遺してゐる。しかしながら彼等の悲壯な行動は實踐の一大教科書として今なほ我が國民の腦裡に深く浸潤し、奉公義烈の日本精神を涵養しつゝあるではないか。

★明治維新の鴻業が大成されたのも南朝四代の天皇が享けさせ給うた御辛苦に負ふ處が多いと云はねばならない。

★明治二十二年六月、明治天皇の思召によつて社殿を創建、吉野宮と稱へ官幣中社として奉齋、明治三十四年に官幣大社に昇格、更に大正七年に吉野神宮と改稱、社格が高まつたので社地擴張、社殿改築の計劃がすすめられ、大正十五年に起工、昭和三年九月竣工して面目を一新した。

★攝社には御影神社（藤原俊基及日野資朝）、船岡神社（兒島箕長、高徳及櫻山慈俊）、瀧櫻神社（土居道場及得能道鶴）の三社がある。祭神は何れも南朝の忠臣である。

★吉野神宮を詠む。

御無念を偲び佇む吉野山　路郎

後醍醐天皇宸翰

と言つて立たうともしない。青年はあきらめたらしく電車の動搖に母を氣遣つてゐたが、長堀橋で降りた。番頭風の男はやれ〳〵と言つた顏で新聞を廣げた。丁度その前へ年の頃なら二十二、三とも見える女が乘つて來たが見れば誰の眼にもわかる程のお腹をして兩手にボストンバッグを提げてゐる。それを見た職人風の男がスット席を立つと、かたはらの番頭へ聞へる樣に、

「此處へ掛けなあれ、何も俺があんたの腹を大きくしたんやないけどな」

皆は氣持よさうに笑つたが、何も知らぬ女は眞赤な顏をしてうつむいてしまつた。

國策

金澤　久留美

五月になつた、
山吹の花、筍の味、
崖にさかつた白藤の花は壓巻だ！
碧い水にはピチ〳〵と、
さくら鱒がはねてゐる、
仙境でないぞ、
此所は食糧生産地だ。

×

もつと奥へ〳〵、
わらびや、ぜんまいのとれる山へ來ると、砂地をおもふ。
防風草に土筆、
どれも鱠にはもつてこい。

×

「矢車の音
遠くから近くから」
お祝ひで作つた句は、
友はにつこり、
男の子が生れたから……。
產めよふやせよ？
ウンこれで七人目、
四十歳のおとうさん、萬歳！！

武玉川四篇研究（一三〇）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

（192）

前矢もたせていたぬ口上

省二＝逸矢をもたせやり、抗議をする。あぶなくてならぬ。

東魚＝誠に恐縮せざるを得ない。見事な御弓勢などと、冷かされてはたまらぬ。

塵山＝現代ならば野球のボール。

（193）

他人から乳母に出ぬかとつれなくも

東魚＝生れて間もなく子が死んだ悲しみの中にあるのに、他人からは乳が餘つて困るだらうから、乳母に出たらなどとすゝめられる。他人は矢張り、本當の悲しみを知つてくれない。

塵山＝胸中の苦悶を、他人は更に知らぬ。

省二＝下五は、あからさまの説明だ。「身内から」でなくて、少しは我慢もならう。

（194）

食ハ喰かと人鬼ハなし

東魚＝迷ひ子とか、放浪者とかを世話する場合であらう。

塵山＝此の「食」の字は「めし」と訓む可きで、其例は多く有る。

省二＝前に「人鬼」が「人魂」かと疑問にされた句があつたが、此句で人鬼と決定させ得る。

（195）

山伏も二人來ルのハ面白き

省二＝錫杖をつき、斧を負ひ、法螺貝を吹く山伏（修驗者）も、一人でくるよりは、二人來た方が、賑やかでもあり、感じが深い。

東魚＝「面白き」の意が十分解せぬが、先達めいたのと、弟子のやうなものと二人相對照して、興が深いと云ふのであらうか。

塵山＝其の一人は緋色の法衣を着てゐるらしい。

（196）

呉服屋我名の下にかしこまり

省二＝頭上に番頭さんの名札が下つて居る。『呉服店顔と名前を見合せる』、『呉服屋の手代も客の見立物』（古句）。名札の下にかしこまつて客を待ち、客と應對する風景。

東魚＝客はそれ〳〵買ひつけの番頭の處へ行つて買ふので、私も小供の頃上野廣小路の松坂屋で、この趣をみて知つてゐる。

塵山＝現今では、其の光景を見られぬ。

（197）

看病に口かすへつてはね出され

東魚＝言ふべからざる事を云つて、看病人の中から、省かれたのであらう。

塵山＝されば口は禍の門といふ。

省二＝看病人に、お喋べりや無駄口をたゝく者は不適當だ。病人は神經過敏なものだ。

（198）

引窓か明けハ律儀にありかたし

東魚＝夜はいつも變らず、明ける時に明ける―毎朝の仕事も、常と變りなく運ぶ―そこを律儀に云々と云つたのであらう。

塵山＝日月は一瞬時も運行を停止せぬ。

省二＝引窓のある家は、都會では段々みられなくなつた。

（199）

後家の田地へ六地蔵たつ

省二＝六地蔵は子供を守護する佛樣。野外や路端に建つて居る。それが後家の田地にたつ。十分句に働きがある。

東魚＝死んだ夫の供養心も思はれる。

塵山＝田園の一風景とも成る。

（200）

餘所の起請のきたなかられる

省二＝起請は其當事者には、何により大切なものなのだが、他人から見れば氣味の悪い（違ふ時は、神佛の罰を蒙るのだから）、汚ないものに感ぜられる。

東魚＝血判などしたのが、他人だ

川柳類題索引（10）

川柳雜誌自一號至二二五號

▼題の配列はすべてABC順、題の下の日本數字は「川柳雜誌」の號數で、算用數字は其の號にある題の發表ページ數、例へば後押し二六（27）とあるは第二六號（第三卷三月號）第二七ページに後押しの句のあることを示すのである。

（二）職業、職名（1）

A

後押し　二六（27）
按摩　三九（43）　四四（55）　五三（48）　一九一（18）　四六（48）　四九（50）
尻
赤帽　一九九（20）
海女　二一〇（34）

B

辯士　三一（29）
番臺　五七（46）　一九六（16）
番頭　一九九（22）
ベスガール　一八〇（18）　一八三（18）　一九一（18）
賣店　二〇四（38）　二一四（31）
賣藥　一八九（18）　一九六（18）

D

大工　三（16）　五一（52）
大臣　一八（13）
代診　二九（19）
丁稚　四三（46）　四五（56）
代議士　一九三（19）

と不氣味に、きたなく思はれるとの穿ち。

塵山＝臍の垢などが附着してゐるかも知れぬ。

（201）

八專に照々坊主派かきかず

省二＝八專（年に六度あり）には多く雨が降ると云ふ。だから照々坊主も巾が利かず役立たぬ。（八專八日間日四日で壬子の日に始まり、癸亥の日に終る。すべて十二日間。照入八專降八專、降入八專照八專と云ひ、八專入りが晴の時は、其後は降り續く。入りが雨の日なれば反すと云はる。）

東魚＝八專には、流石の照々坊主も參つたとの可笑味。

塵山＝坐五の「派がきかず」は、少し拙いと思ふ。

（202）

ゑひすの顏も十月か骨

省二＝夷講。招客をして大に設宴せねばならぬ。益々にこ〳〵顏をしてゐても、その心構は要る。

東魚＝常に、にこ〳〵して御座る蛭子樣の顏も、別して十月が本當の夷顏であるべきだ。夷講をやる十月が一との心持。

塵山＝骨といふと眞面目で嚴格の顏のやうに聞取れるが、猶且にこ〳〵顏であらう。

（203）

はつち坊主に人參のから

省二＝鉢坊主（托鉢してあるく乞食坊主）に、人參のからをやる。人參と鉢坊主の對照に句趣を存す。

東魚＝「から」は勿論煎じ殼で、又更に煎じ出して溫まるのであらう。

塵山＝昔は人參の煎じ殼でも、頗る貴重のものとされたに相違ない。

（204）

胡葱ハ結れる草別れ草

省二＝出代りの句。女中さんの新舊顏が代る。結ばれると別れるとだ。

東魚＝前說の通りである。

塵山＝出代女に胡葱を配せる句は陳腐で類型的で鼻につく。

（205）

かたまつて居る棧留の質

東魚＝安價な品は、安物同士一所に、一纏めに置かれてある。

塵山＝當時の棧留は、安價な織物でなかつたと、私は思ふ。

省二＝「かたまつて居る」の表現からは、東魚氏解の如くにとれる。ざうさなく置かれてある、かたちであらうから。然し塵山參說通り、決して安價な物でなく、一衣料が二兩乃至五七兩を要したと云ふ。元は印度からの舶來品だ。似せた品を織りもしたらしい。「武玉川」三篇には、『棧留を着るもさかりの草履取』なる作があり、「棧留」で草履取の贅澤を語つて居る。—此句は本物の棧留でなく、單に棧留縞を云つたものではなきか、さすれば番頭などが着てゐたもの、「かたまつて居る」も判斷し得る氣がする。

（206）

加持の道具を怖そうに拭

東魚＝全く加持祈禱の道具類など、何か不氣味な氣がされる。

塵山＝加持の具なる獨鈷だの、三鈷だのといふ物を見ると、兵具のやうな氣がする。

省二＝普通一般の佛具とは、違つた感じを受ける。

武玉川研究正誤表（二三一號）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
十五	三	廿三	排	挑灯
十五	三	廿四	排	挑灯
十五	四	三	大晦を	大晦日に

E
エキストラ　一八一(19)
驛長　一八九(19)
F
古本　三五(32)　五八(46)
三〇三(22)　三〇三(19)
三〇五(35)　三〇七(32)(33)
三二(26)
古本屋　三八(35)　四七(28)
婦人記者　五五(49)
古着屋　三三(10)
老役　一八〇(20)
G
下宿　三八(32)
外科　四五(34)
呉服屋　四五(52)
藝者　五〇(50・56)
一八〇(19)　一八八(17)
藝妓　一三五(53)
外交　一七九(11)　一八〇(19)
三〇七(32・33)
下女　五五(58)
下足番　五七(50)
畫家　三〇三(23)　三〇六(34)
H
百姓　一五(11)　一九三(27)
三一〇(23)　三〇六(28)
齒醫者　三〇(32)　四六(47)
ヘツタリ屋　一七(16)
ホテル　四〇(30)
花賣　四五(51)
本職　西(30)　二四(30)
博士　五五(52)　二四(30)
拾ひ屋　一九〇(20)　二二(31)

—以下次號—

近作柳樽

路郎選

醫務室のガラス器金魚泳いでる　兵庫縣　春童
塚通ひまだやめられず派手に生き　同　同
北風へマントもたれて歩くなり　同　同
豪傑に似た名前なり少年工　同　同
心がけいゝ女なり針と糸　西宮　寒草
見送つてやつたに女すけなすぎ　同　同
ネクタイも買はず帶締買つてやり　同　同
㊙はまるで切手を賣る如し　朝鮮　東狂子
木の芽草の根山家に生きる味　同　同
坑内を春の陽に出てけつまづき　大阪　寒浪
ローソクを繼ぎ足す樣に子に孫に　同　同
近頃は合成酒をも飲み給ひ　同　同
健啖を女房近頃喜ばず　大阪府　夕紫男
管制の街に嬉しい月明り　同　同
荒鷲を生んだ母校は平家建　大阪　沈
轟沈の今は無心に浪うねる　大阪　勢三
想ひではあちら向いた父ばかり　同　同
會費だけ收める倶樂部三つ持ち　大阪府　庸司
まんざいの中で課長はよく笑ひ　同　同
何もかも出來る我が娘が嫁き遲れ　和歌山　宏方
嫁くのにセーラー持つてゆくと拗ね　同　同
母親と見てとり嘘を持ちかける　神戸　小城子
もう嘘も云へず師走の風の中　同　同
國民服六十過ぎたとは見えず　大阪　風柳
十八時機械疲れたとも云はず　同　同
遺産とはこの身この足この腕　同　同
長男の衣料切符はそつと借り　同　同
轉校へもう黑帶の名を知られ　同　同
卒業も入學もある子澤山　同　同
三人になつて故郷へ歸つて來　大阪　同
嫁きおくれ生花だけの趣味を持ち　同　同
殘留燈雨の細さに立とまり　大阪　花津子
ごみだめの中で茶の花春を咲き　同　同
百合だけを活けて愛人戻るなり　同　同
ユリの香のたかせレコード廻るなり　同　同
年寄りの煙草のつりはもどかしや　奈良　晶平
うちの大將少尉で出征中ですわ　同　同
友達であり親類のはしであり　京都　春渉
御詠歌屋の戀には遠い顏ばかり　同　同
二十割でも憎い程よくはやり　同　同
素人としんから違ふ坐りやう　同　公子
豆債券四等が當り春が來る　芦屋　公子

休閑地栽培　二ツ

素人を恨んでる樣菜のいじけ　同　同
今日も又指で掘られた赤かぶら　同　同
子等曰く硯の水も配給と　愛媛縣　曉明
宿題のこゝらは親の力らし　同　同
歩くのもいゝさと春の風を受け　同　同
榮養食兎の餌に紙一重　青島　委滄浪
燗と云ふからにはこれは酒らしい　同　同
聽き役にまわり箸とる女客　松本　義春
一つ違ひ食パン券に見離され　同　同
賣り切れの札下げ奥で喫つて居る　同　同
戰士乘る汽車だ煙も只ならず　同　同
牛の脚地のたしかさに應へつゝ　松山　耕一路
ぬれ濡れた幹、海獸の皮膚に似て　同　同
雀の樹「森の鍛治屋」の譜が流れ　倉吉　悟志
五本松唄とは別に箔がつき　同　同
有難き聖旨に鋲を打ち續け　同　樹
ヨシ〳〵に勝手の違ふ壘を踏み　大阪府　松樹
敵潜に船長よしと舵を取り　同　同
新婚の妻寢臺は嫌と言ひ　同　同
都々逸も二十割では唄へない　同　丙
聽診器オツ放り出と飛車を打ち　大阪府　一丙
秒針が鋭く刻む手術室　同　同
患者まだ昨日のままのページなり　大阪　白路
友自爆の報に空の青すぎる　同　同
そのそこがまだ使へます母の口　同　同
塵紙のちぎれる樣に夜が白み　同　同
一日へ四季を感じてゐる南支　南支　松太樓
世渡りと別に軍服負けてゐず　同　同

ボルネオの正月

日本の日本のと罐詰切る日なり　ボルネオ　風來子
金儲け主議あゝあはれなる　同　同
お隣に來客がある米をかし　下關　水月
婦人部長ことわりきれずまた續け　同　同
モンペーで初給を貰ろた子がもどり　下關　精花
學友と逢へば背中へ一人負ひ　同　同
人を燒く煙と見えず春の山　芦屋　礎石
ふりちんで遊んだ頃の君と僕　同　同
戰ひ拔かん覺悟は街で鷄も飼ひ　大阪　三丸
未熟さを詫ひて遺族へカメラ向け　同　同
美術家に見直ほされるモンペイ美　大阪　掬夫
二十一日と知らず大阪中を歩き　同　同
小兒科で煙草のむ程氣がきかず　大阪　詩朗
行き先を問はれた闇のあはてゝ　同　同
春のひま野にも山には食べる草　大阪　いづみ
風流と作戰乘せて艦すゝむ　同　同
決戰下望み通りな子が生れ　丸龜　浪二

隣組副長になりて

日本を護る小さい役がつき　大阪　美奈子
子の樣に甘へても見る妻であり　同　同
叱られに來た娘の睫毛が長かつた　大阪　翠雲
滿員車課長の靴も踏まれてゐ　同　同
犬も居る御方と知らず二階貸し　大阪　松風
寢過したのを齒刷子も知つ居る　同　同
さんざんに待たせ社長逢つくれ　大阪　惠美須
灯に稼ぐ女も轉業すると云ひ　同　同
ウインドへ泊來らしい影もなし　兵庫縣　茂
消火器の埃を感謝して拭ひ　同　同
工員の募集五十にまだ觸れず

いゝとこだと地下足袋を脱がせられ　島根縣　紅絲
代讀へ組長の聲しどろなり　同　延枝
盛者必衰意地にはあらずさゝ流し　大阪　花子
春雨へ傘をわすれて情緒めき　兵庫縣　秋子
日曜日女中の用もことづかり　同
山吹の影をくづしてスターゆく　同
見えすいた男の嘘へさからはず　大阪
天地人おなじ乳房を吸ふた子が　同

バーモ長官來朝

聖恩に東亞の中のビルマ知り　東京　凡平
散歩許可もう戰場に行ける氣に　同　平
オールドミス子供を貰うかと思ひ　大阪　葉光
經木書き同名異佛と思へども　同
從兄妹かと友は先手を打つて聽き　大阪　定ひち
氣短かな課長の家庭も想像し　同
入學日姉らしくなる朝の膳　山口縣　美沙女
强意見兄立ひざになつた聲　同
晴天にみなはれ大阪城浮ぶ　大阪　駒志希
だまされてやらう大きく頷いて　同
買物の事から婦喋りだし　大阪　照二
おそがへり結局うちでお茶をのん　同
一列の秩序を亂す子の怒り　臺中　武士
生活へ未だ敵性の文化など　同
重役の家へ招ばれた同じ趣味　京都　ふじ彌
軍港で會へば男のみな强し　同
死んだ子に着せてやりたい柄もあり　大阪　紀川
夕刊をビールの列で讀み終り　同
そやけんど矢張り金がもの言ひま　大阪　甚人
五郎作よわれにやかなはぬ國の神　同
喘ぐ馬に弛み心を見る日あり　神戸　美水
子を叱る妻の眞劍さを恐れ　同
肩車遠い戰地は見えぬけど　京都　蒼氓
八つ打をはき必勝の人が行く　同
練成へ腰辨當の市長さん　大阪　研路
徵用であつさり暖簾捨てる友　同　出雲
混血兒夜の港が好きでした　同　無名

地方版父に似た名が載つてゐた　同　雙馬
哨戒機海の靑さも見て歸り　廣島　治
子を抱いて若さを他人に振りむかれ　同
瞳が頬が情ない人に似て育つ　津山　菁紅
三十歳身の凡庸をいなみ得ず　同
親一人兄貴の嫁の話する　大阪　隆興
重爆の亂舞へ感謝の眼で仰ぎ　同
小使も課長と同じ蘭の趣味　大阪　乾壺
思ふ程うらみも言へず借電話　芦屋　千鶴子
學校へ來た軍事便うらやまれ　大阪　晴男
信念のまゝに御國の楯となり　大牟田　逸桂

入學

合格を泪で笑ふ母であり　大阪　實穗
橋立を繪にして宮津陽がしづむ　京都府　允子
縫ひながら針娘は春の話する　大阪　醇子
人形の睫毛へ春の風が吹き　大阪　明子
番頭とうまがあはない女戸主　大阪　ひさみ
志士獄中の作とか義憤をおほゆ　臺灣　番兒
父親の頑固うれしい日もありて　大阪　利美
赤裸々な言葉男の長所しる　大阪　流舟
大阪の客へ供出米のこと　大阪　半歩
言ひ分があるが默つて講評きゝ　香川縣　平石
添乳する妻の姿ぞ靑い鳥　大阪　佳春
パーモ來て日本の旗を意識しぬ　大阪　三葉
喫茶店ここにもボロ足袋干してあり　大阪府　松綠
元氣です北と南の子の便り　大阪　伊三郎
戀だろかけなされてゐるのが身に泌みる　大阪　多不知
なやみます書齊が闇に包まれる　大阪　花路
このオモチヤせめて三日は有つてほし　西宮　加奈子
雛飾り塵を拾ふも樂しさう　安東　秋人
女房の話はぐちも少しまぜ　大阪　拓郎
殘されたトロツコ子等にゝ舞臺　尼崎　美世子
急行車の通るたんびに位牌搖れ　豐中　古太朗
彼方も孫此方も孫で母忙し　大牟田　平人
初對面椅子ずれ光る服が座し　廣島　雞其佛

春らしい泣聲をする隣家の子　津山　蛙柳
散華て行く歌劇の兵は美男なり　尼崎　治
慾望は池の破紋に似て延る　大阪　佳津女
增產へ今日も雜草の露を踏む　大阪　六龍子
ビルマ戰そのまゝ釋迦は寢て御座る　ビルマ　吾平
日向ぼこあんよが上手と遊ばる　津山　燦太郎
角帶も前掛けも捨て配給所　長野縣　臥牛
その顏で愛して呉れと言ふのさい　松江　祥月
法名を幾つ書きしぞ僧更けて　奈良縣　彌生
愛着のつきせぬ子供の似顏描き　滿洲　錦風
献金は人並にする未亡人　松江　初惠
おかしくもないに笑ひの上手下手　釧路　孤浪
漫々的滿洲人に持つ希望　藤　銀波
姉あんが未だをるらしい嫁きおくれ　藤　醇

汽車の旋

煙草の火とりつぐ女いゝ女　廣島　者二
胎教は軍神の像を拜み居り　大阪　聖仙
友訪へば衝立近く子が覗く　大阪　風情

陸軍記念日

記念日のモンペ姿を見染められ　大阪　泰彌
まな板の乾いたまんま妻の留守　滿洲　しけを
擊ちまくる戰士祖國は花日和　京都　康一
鐵を木に變えて銃後の構へなる　大阪　靑々子
組長に漢方藥を敎へられ　松南改め大阪　研太
親と子がこゝで別れる軍需工　名古屋　ひろし
一日を戰ひ無事に夕燒ける　京都　あきら
老嬢はたんすの着物うらめしく　京都　祇童
お大事にいつて看護婦卒業し　大阪府　正起
打診する女醫指先に若さ見せ　大阪府　溪路朗
空襲へメガホン聲をまきちらし　大阪　忠溫
待つ友へ窓でネクタイ結んでゐ　神戸　哲水
花便り聞く日に雪が降りました　布施　喜多惠
店がまへきたなくすしは高いです　兵庫縣　葛藤
手心があると知つたら誇れまい　堺　梅里
驛頭で妻ためらわず手を握り　岡山　鷄子

艸木徒然

西田艸樂

かんなれのへそ

小供の頃こんな名で呼んでゐた植物がある。恐らく今の植物學の大家に聞いて見てもそんな植物は知らぬと答へるに違ひない。

尤もこれは私の故郷の丹波で言つてゐた方言なのであるから、知る人は少いに極つてゐるが、此の方言の由來を考へると、その植物につけられた名として、まんざらでない氣がするので、考へれば考へる程面白い名だと思ふ。

どういふ植物かといふと、私の生家の前栽の日當りのよくない一隅に、一とかたまりに葉と葉が押し合つて生へてゐて、その葉を押分けて見ると、地下に縱横に匐ひまはつてゐる蔓莖の節々のところから、一寸或は二寸位の葉柄が二個宛出て、葉の形がやゝ心臟形をなし、二個の葉柄の分岐點のところに、よほど氣をつけぬとお目にかゝれぬ、暗紫色の鐘狀花が秋の頃に咲くのであるが、よほど閑人でない限り此の花を見る機會はなからう。生家には今尙前栽に生へてゐるが、家族達は「あれに花があるかいな」と今に氣がついて居るまいと思はれる。

年中黑味を帶びた青い葉があるが、その葉の高さ以上には上に伸びたためしもない、只横へのみ地上を這つて莖が伸びて行く。かう說明したら植物學者なら判る筈である。

さうだ。これが私の小供時代に呼んでゐた「かんなれのへそ」で、ほんたうの名は「ふたばあふひ」といふのである。

ふたばあふひであるなら、名高い德川の家紋に描かれて居る草であるから、皆よく知つてゐる、といふかも知れぬが、實のところこれをよく知つてゐる人はあまり多くはなからふと思ふ。

一路集

募集句

大陸

濤明選

大陸に同生共死の進軍歌　葉光
大陸へ來てあゝ萬歲の泌みた土　英雄
大陸の廣さ解らぬ汽車の旅　青洞
大陸へ行く花嫁の覺悟きく　青々子
住み慣れる大陸に同じ影があり　乾圭
大陸へ呼ぶポスターの太い線　勢三
此の道は拓士の村へ續くなり　詩朗
大陸の端に朝鮮ひつかゝり　東狂子
朝鮮へ來れば獨乙も陸續き　同
警備いま大陸の夜の星に立ち　千枝丸
大陸に近く船室みな元氣　長閑
柳の芽から大陸の春が來る　しけを
大陸のロケ主題歌と李香蘭　武士
大陸に日本人といふ襟度　三千樓
少年の夢大陸へのびて行く　研路
殉國の血で大陸は朝になり　翠柳
轉業の夢大陸を馳けめぐり　松南
トラクターに日の丸たてて拓士村　正起
着ぶくれた子が大陸の豚を追ふ　慶一
開拓のこゝら馬蹄の出たところ　同
滿洲の車窓平野を走る丈　秋人
大陸の廣さ開墾忙しい　祥月
大陸へ來て朝の陽を太く吸ひ　鶴誠
武運あり大陸の陽に顏を剃る　菁紅
大陸はまだ〳〵寒くなる便り　小城子
大陸は大和男の子の行く所　可學
大陸へ日本文化を再現し　聖仙
嫁取に大陸灼けが歸つて來　正美
大陸の端で戰かふ獨ソ戰　彌生
大陸の便り二陣を集めさせ　白水
花嫁の瞳に大陸はいゝ所　祥月
大陸の春姑娘の靨から　鶴誠
大陸の埃洗へば兵若し　菁紅
內原の夜は大陸の夢ばかり　佳春
大陸の朝ほのぼのと拓士佇つ　青衿子
大陸に肩で風切る祖國を持ち　宮川
大陸の夕陽を譽めて便り來る　春童
大陸の兒に懷かれてアイウエオ　翠柳
大陸の吹雪ソ聯の灯も消えて　同

旅館

柳路選

滿員ですと旅館の女中立つたまゝ　芳露
旅館の鏡臺抽斗をあけて見る　士節
落ち着けば旅館の障子指の穴　寒久
旅館から出した手紙の走り書き　彌生
釣客へ旅館の亭主舟も漕ぎ　利一
サアビスはどうも二割取る宿屋　臥牛
公用の旅館宵に寢てしまい　春童
先發が旅館の浴衣來て迎え　猪三郎
旅館からSOSの便りくる　佳春
入營の感激を抱き宿に寢る　一滴
ホテルへ往かず將軍知つて宿　青々子
古ほけし旅館の由緒があるらしい　英雄
艶のある旅館の廊下みちびかれ　さわだ
田舍者と見たか宿引追つて來る　昌坊
御贔負の宿から年賀狀がつき　一葉
溫泉のポスタへ宿の名が太く　平人
新驛の噂へ宿の杭が立ち　藤樓
履物が朝の旅館によく揃ひ　世志一
そこまでのポストへ一寸宿の下駄　初舟
宿帳へ無職と書いて氣がひける　十四之
寬いだ宿の浴衣が派手過ぎる　天風
横の町に來て風流な宿を選り　草兵
忘れてる旅館から來た年賀狀　定ひち
掛抽も去年と同じ旅館の部屋　同

葵の紋を知らぬ者はないが、あの丸に三個の葉がある。あれではちよつと、この植物は思ひ出せぬものである。同じ紋章で見て一見して解るのは、やはり此の植物を寫實的に描かれてある加茂神社の神紋である。これならほとんど實物に近い。德川の紋はこれから變化したものである。

左様、ふたばあふひは一名かもあふひとも呼ばれる。加茂神社のお祭は葵祭の名で呼ばれる。

加茂山のみあれをちかみ今こそは
神の宮つこ葵とるらめ
現存　六帖

ちはやふる神の卯月になりにけり
いざうちむれて葵かざらむ
新勅撰和歌集

宿毎にかざすみあれの葵草
神のしるしやときはなるらん
現存　六帖

加茂神社のお祭に此の草が用ひられる狀況はこれらの歌から察せられるがよい。加茂祭に葵を用ひ始めたのは欽明帝の代からだと云はれるからざつと今から千四百年の昔のことである。

ところが、實際はもつと古い神話に始る。

葵には雷も徴して還ざわり
古川柳

この句から說き起そう。加茂の祭神建角身命の女玉依姬が瀨見小川に遊ばれたとき、川上より丹塗の矢が流れて來た。とりて歸り床に挿されたところ、矢が美男子に化した。それから玉依姬は孕ませられて男子を產まる。これが別雷神と申す。御子別雷神は後天神を慕つて昇天された。御祖神達はそれを嘆かせられて葵草で祭壇を飾り降臨を祈られた。といふのである。別雷神は幼少の頃この葵草がお好きであつたとも云はれる。

で、今でも加茂祭に用ひられたあふひを頂いて歸り軒に吊して置くと、雷除のまぢないになるといふ信仰がある。その事から、丹波地方で此の草を、かんなれのへそといふのに緣故がありそうである。かんなれさんといふのは私達子供の頃云つた雷のことで、そのへそと名がついたの

化膿症
アルバルジル錠
中耳炎
扁桃腺炎
齒槽膿瘍
淋疾
山之内製品
J

旅館の宿のこんな處に部屋が有り　カズヱ
一應は宿屋へさぐり入れに來る　正朗
新婚へ宿の女中が障子越　光子
優勝のエール旅館の二階から　朔郎
宿の名を浴衣で知つて呼ぶ女　曉曉
旅館にも廻覽板で顏馴染じみ　照弘
桶と下駄干して旅館の晝のどか　牛歩
氣が合ふて飲む事になる旅の宿　詩延
商用で來たを旅館は知つてゐる　詩朗
驛前の宿へやむなく雨宿り　伊太吉
對染めの浴衣へ宿の傘が來る　若朱女
番傘へ旅館の屋號を派手に見せ　治男
街路から見える旅館の應接間　晶平
雨の驛旅館の文字が大きく見へ　一馬
久さかたの故國の宿の丹前よ　朴泉
自動車を下りて旅館の坂になり　初惠
一風呂を浴びて旅館の貸浴衣　祥月
海苔卷きをほめて昨夜の宿の事　周峰
旅役者雨の旅館へ無表情　しけを
行商のかわる旅館で春の雨　神樂
官服をぬいで旅館の膳につき　葉光
長距離をかけて旅館へ問ひ合せ　太棒
スリツパの音で旅館の朝がくる　同
宿帳へ本名を書く双葉山　秋人
車中にて睨みあつたと同じ宿　默魚
湯上りで旅館を出て遊ぶ先　一人
宿帳へ大きく士族と書く誇り　青衿子
なにもかも忘れて宿の湯へつかる　正美
木炭車旅館の前で二人のせ　伊三郎
戰死せる友の詩集を宿で讀み　祇堂
宿帳へまさか內緣とは書かず　松南
むき出しの言葉うれしい田舍宿　泥柳
宿の客いろんな職業持つてゐる　潮流
去年來て今年もおなじ宿の部屋　忠一
(佳)遠來を旅館に泊めて裏住居　楓萊

(佳)小屋近き旅館の窓に旅役者　甫光
(佳)大通さけて一流旅館あり　林葉子
(佳)この邊の稔りも聞いて宿の膳　千斗
(佳)早だちへもう味噌汁が溫まり　三丸
(佳)霜やけの女中旅館の白い朝　勢三
(佳)寢付かれぬ夜を旅館の鯉がはね　正二

眼藥　水車選

眼藥に勇士も勝てぬ涙顏　凡平
眼藥へ妹もお行儀よく坐り　萬龜子
眼藥もハンドバックに入れて置き　祥月
眼藥をさす不器用な口を開け　武士
眼藥をさせば今迄泣いたやう　天風
眼藥も入れて慰問の品揃ひ　三葉
眼藥をさして蘇生の空仰ぎ　美世子
眼藥へ意見の違ふ父と母　松綠
眼藥をさして不安な夜を明かし　小城子
眼藥をさすも化粧の一つにて　寒浪
眼藥をさして勤めの父は行き　古太郎
大阪へ來て眼藥を放されず　勢三
迷信へ眼藥などと病んで居る　茂
眼藥へもう散歩だけ許される　風柳
椽側へ出て目藥さし直し　ふじ彌
おびんずる撫でるんびと惡くなり　伊太古
眼藥を二度さし醫師は治ります　菱三
眼藥をさして戰果の記事を讀み　翠柳
(佳)眼藥を敵のやうに言ふ按摩　秀
(同)眼藥を二三度變さ醫者へ行き　松風
(同)眼藥を提げて映畫も見て戻り　潮花
(同)眼藥を與へて宣撫村を發ち　正美
(同)眼藥へ小孩なつく宣撫員　英雄
(軸)點眼のたゞ一滴へ戰友の顏　水車

は妙だが、昔は丹波でも此の草を雷除に軒なんかに吊したのではないか？

雷の子はすはしりの臍を食ひ　古句

どうせ雷さんはへそがお好きと見える。夕立の時にお臍をとられるよと、はだかの子供に着物を着せるし、親雷が人間のへそを取れば子雷はほらの子のへそで取るだらうといつた句のある所以である。だから、かもあふひを吊して一番お好きなおへそを供へたつもたりだつたかも知れない。これは私の名發見(?)である。

二種類の葵

ところで、この葵については、非常に誤られたことが多い。元來葵の字である。葵紋と云ひ葵祭と書き、澤山葵の字を用ふる場合があるが、それらは皆前に述べた、ふたばあふひから來てゐるが、そのあふひに此の字を充てるのは古來の習慣だが、今一つの葵のあることを承知して居らぬと文學上にもよく誤られる。

今一つの葵といふのは、錦葵科の植物の一群で、たちあふひ(蜀葵)、ぜにあふひ(錦葵)、とろろあふひ(黄蜀葵)など、これらは皆美しい花の咲く觀賞用の栽培草本で、皆葵の字がついてゐるが、支那から渡來した植物である。日本の山野に自生する　ふたばあふひ　の類はよく似た數種の草があるが、これらは、ふたばあふひが雙葉細辛、うすばさいしん(細辛)かんあふひ(杜衡)など括孤中の漢字があつて、葵の字は一つも出てこない。にもかゝはらず此馬兜鈴科(うまのすゞくさ)の植物に、日本では古來葵の字を用ひ來つた。だから、かういふ面到なことが起る。

日の道や葵かたぶく五月雨　芭蕉

物のけかいたむ葵のうへなほし　慶友

芭蕉の句は冬葵いふ錦葵科渡來植物であらうと思はれるが、着想は「葵葉傾日」なる支那の書物にある文句から來てゐるらしい。

慶友なる俳人こそは何を言つたのか判らない。といふのは、葵の植へ直しなんて興がつてゐるところから見ると、やはり、たちあふひ、ぜにあふひの類らしいが、「物のけか」に到つては、例の「葵の上の御物の氣」源氏物語の葵上前のことを匂はしてゐるのだが、それなら、かもあふひの方に緣があるので季題も問題であらう。

かういふのは一例に過ぎないのであるが、葵の字について心得べきは前に述べた通りで、歌を詠んだり俳句を作る人が、馬兜鈴科のあふひと錦葵科の葵を混同するので、注意を促す次第である。川柳にも

立葵敵にとんぼがへりさせ

落書も一言坂に立葵

などの古句があるが、これは家康の臣下四天王の一人といはれた本多平八郎忠勝の定紋立葵を詠んだ句であるけれども、立葵の紋といふものは、現今いふところの錦葵科の、たちあふひでないことは、そんな紋章がないからであり、立葵とあつても、やはり、ふたばあふひの變化した圖案である。

雑記帳

福田　夢

四月號の雜誌へ一笑さんが「夢ものがたり」といふ一文を書かれてゐる。拜見して仲々面白くしらべられてゐると思つたが、その結びに「夢の世界は確にある。しかしそれは何人からも科學されない大きな謎の世界である。」とされてゐる、が夢は決して科學されてゐない問題ではない。是非、一笑さんや一笑さんの文の結びの如く夢と云ふものを考へてゐられる方に、フロイドの精神分析の内「夢判斷」エリス「夢の世界」なる書物の御一讀をおすゝめしたい。

○

地下鐵難波驛ゞ南海電車の方へ上る所に、昨今夜な夜な可憐？な少女が、昔の樣に花束ゞ賣つてゐる。例の如く彼女等にはふさはしからぬ媚びる樣な風で通る人達によりそつてくるのも、「お花は如何ですか」の賣り言葉も昔と變らぬが、その花束を見ると何んと造花である。サルヴイヤ、カーネーションと云ふ今時のものでない花ゞ持つてゐるのも道理である。〃造花賣りの少女〃——昔の所謂花賣り少女なら幾分のあはれさも覺えるが、造花では同情も起きない。彼女等が自ら進んで造花ゞ賣つてゐるのか、それとも彼女等の後に四十過きのデップリした親方がついてゐるのか知る由もないが、あまりにも淺薄な風影である。

新發賣
消炎鎮痛濕布藥
粉末エキホス
主治効能　感冒、肺炎、肋膜炎
氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎
ロイマチス、神經痛、打撲痛
捻挫等
今發エキホス姉妹品として發賣したる本劑は專らその藥効並に持續時間の永續に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末濕布藥なり
一、本劑は長時間使用出來るやうに工夫してありますから持續時間は任意にして支差へありません
包裝
100瓦
200瓦
500瓦
1瓶
エキホス姉妹品
C-PE19

我社創立廿周年記念事業の二

催主社誌雜柳川

會柳川物動方南

時・昭和十八年四月一日
處・市立天王寺動物園内

★皇軍の赫々たる戰果は一億國民の心を南へ南へと運ぶ。南方への智識は渴した人の水を求めるに等しい。この時にあたつて我社では四月十一日午後一時から大阪市立天王寺動物園内を第一會場として、ランマンと咲き誇つてゐる園内の櫻樹に陣中川柳短册三百點を吊り提げ一般の鑑賞にまかせ、第二會場動物園事務所階上に於て午後二時半から「南方動物川柳會」を開催した。

★陣中川柳の短册を物珍らし氣に手にした銃後の人たちは、これが戰線勇士の作品であることを知つて感激を新にしてゐた。そうした風景を我社の寫眞班がパチリ〳〵とカメラに收める。

★事務所の階上で開かれた南方動物川柳會は鄙下にまで溢れる盛會振り。武部香林氏の司會で國民儀禮によつて始まる。寺内動物園長林前動物園長列席の下に句筵展開。水谷鮎美氏の挨拶。兼題は「象」路郎選、「蛇」綠雨選「鰐」豆秋選「猿」紫香選「鹿」默平選、席題「動物園雜觀」は水客選で、下記の如き名吟佳什への喝吟を行つた。そして各天位に贈賞した。

★寺内動物園長の「南方動物漫談」の講演後主幹の動議によつて、寺内動物園長、林前動物園長を圍んで、會員から隨意珍問實答の座談會に移ることとした先づ、主幹から「動物の肉で何が一番うまいか」といふ質問の第一矢が投げられた。云ふまでもなく南方動物についての質問である。

園長—「大正九年でしたかな。犀の試食をやつたのは……。二萬三千五百圓で買つた犀でした。隨分高價な肉を食つたものです。しかしあまりうまいことはありません。」

主幹—「外に何か變つたものを喰べられましたか。蛇などはどうです？」

林氏—「蛇は肉が白くて鯛の身のやうです。隨分いろんなものを喰べましたが、もう看板を下ろしました獸物の肉と鳥類の肉とはくらべものになりません。肉食をしてゐるものの肉はどうしてもくさいですね。一體喰べられぬ肉といふものはありませんね。」

園長—「同じものの肉とすれば、大きくなつたのより若い方がうまいですね。」

東雀—「象は一日にどの位喰べるものでせう？」

園長—「時局下、動物園も食料に困つて居ります。象は白米を一回に四升喰べますからね。」

默平—「鋼蛇や鰐にも食物を與へるのですか。」

園長—「鋼蛇には生きた兎、目方七、八百匁のものを一ト晩に三頭ぐらいやります。食慾があるなしはすぐわかります。食慾があると電光石火の早業で飛びつきます。そして先づ締める。十分か二十分すると死にます。死後必ず頭からのむ、そうでない場合には一たん出して又頭の方から嚥下します。卵などは一日に二三十個嚥みます。」

一笑—「卵などはそのまま喰べるのですか。」

園長—「そうです。」

林氏—「のどを通る時にわれてゐるのです。」

青踏—「食糧難はどうして補つてゐられるのですか。牛肉などありますか。」

園長—「牛肉は勿ないので、代用に馬肉を使つて居ります。馬肉は豐富にあります。鯨肉も使用しますがこれは冷藏庫が必要です。」

幽王—「猿に藝を敎へるのには、どの位の日數がかかるものですか」

林氏—「猿にもよりますね。頂戴などは死んだりはかしこかつたので、一度で覺えました。自轉車乘りは一日一時間位、のべ時間にして二十時間でうまく乘れるやうになりました。猿に藝を敎へるのは猿が信用する人を先つくることです。その人のいふことを何んでも聞きますから……先ほど象の食糧の話が出ましたが、何を食べさせるにしましても一日に四十貫乃至六十貫は喰べさせなければなりません。」

質問者は自分の食量と比較して見（二十二頁上段へ續く）

動物園内の櫻樹に飜る陣中川柳短册

麻生川雜誌主幹（右）と寺内天王寺動物園長（左）

兼題「象」　路郎選

双葉山 象は大きいなと思ふ　不二
喰ふために 象も曲藝やつてのけ　登志緒
象の背に 今はためくは日章旗　同
配給は 象の分量も考へる　東雀
白人の 鞭のきびしさ象怒る　同
戰定に 象も一役買つて立ち　同
象使ふ 事もおぼへた輜重兵　風柳

兼題「蛇」　綠雨選

巳さんを祭る女は長煙管　妄夢
空襲にどうなるんかとどぐろ卷き　綠葉
信心の土產に蛇の藥買ひ　竹莊
毒蛇がいつち恐いと云ふ土人　一笑
南方で蛇と友とに勝ちぬかん　矢納
思出は蛇もくらつただけのこと　登志緒
密林の蛇を嫌ひな兵も征く　葉光
大阪の溫度が合はぬにしき蛇　豆秋
ポカポカといい時候なり蛇の皮　同
毒蛇の鱗が冴えた雨上り　勢三
蛇食べて進む日もあり日の御旗　豆秋
畦道で出合ふた蛇に立ちとまり　綠匿

兼題「鰐」　豆秋選

結局は動かぬ鰐を見て戻り　潮花
占領地鰐すき燒にされてゐる　茂
鰐强く〳〵生れて無口也　鮎美
日の丸へ鰐コツコツともぐりこみ　泉泡
鰐すでに闘志の涸れた眼をつむり　青踏
鰐はまだ再にありつけぬまへなり　綠雨
追擊に鰐の頭をふんで行き　登志緒
春爛漫アメリカ鰐は不貞腐れ　文雄
四ン月の水をうごかぬ鰐二四　一笑
鰐曰く「ハンドバックは嫌ひです」　綠葉
鰐の肉食つて來ました臨還兵　勢三
柳の芽伸びてゐるのに鰐ねむる　香林
ワニの目を開く日の來ぬ鰐咲く　默平
鰐の淵恐さを知らぬ兵泳ぐ　勢三
寢てばかり居つても鰐はこわがられ　豆秋
漫畫々々鰐も日本に協力し　登志緒

（以下第二十四頁の「各地柳壇」へ續裏）

てその大量に目を丸くしてゐる。林氏に話を續けられる。

「……蛇の食物に鶏、兎、山羊などですが、それぞれ專門的になつてゐて、鶏を喰べる蛇に鶏しか喰べません。外のものをやつても喰べやうとしません。二年八ヶ月も何も喰べなかつた蛇が居ります。斯うなると人間の根くらべです。ロから開けて肉を入れてやる方法もありますが、そうすると習慣になります。第一それは危險でまことに困難な作業です。」

一笑―「當園にはライオンの仔が沢山ありますが、虎の方は仔を產まぬのですか」と殖えよ生めよの問題に觸れる。

園長―「悲しいことにあれは後家さんですよ。嫁かず後家なんです」

一同哄笑。

廿氏―「日本で虎が仔を產んだ例は極めて尠ない。熊本に一度あつただけです。」

園長―「あまり產れない方がよい。食物が大變ですからね。時局下空襲などのあつた場合には射殺しなければなりませんから、それに射つ時期が問題です。あまり早く射つ譯にもゆかず、と云つて時期を失したら危險ですからね。」

こんな話が際限なく續いて時のうつるを知らなかつた。主幹と園長との間に、動物園の移轉問題に於ての話も交はされた。

一同は南方動物に關する智識に滿腹を得たので、主幹から園長に感謝の言葉を捧げて話を打切ることにした。特に前園長が臨席して下さつたことに敬意を表し、引續き主幹の「陳中川柳の句に就て」の講演があり、斯くして南方動物川柳會の幕を閉じた。時に午後五時。

出席者（順不同）

路郎・綾雨・幽王・芳夢・勢三・登志緒・利美・白星・白鳥・惠華・須水客・香林・良夫・樂香・柳花・房子・風柳・東雀・一馬・翠雲・英雄・葉光・淺水・文雄・不二・探夫・一笑・默平・鮎美・綾葉・茂・泉泡・房一・清路・松風・拓郎・聖司・猶雄・竹莊・フジ子・彌十郎・滿潮・リリ・奈那

柳界展望

川・協のページ

催

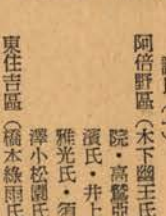
▼本社主催南方動物川柳會（本社二十周年記念事業の二）は四月十一日午後一時から市立天王寺動物園内及び同事務所階上で開催▼松坂倶樂部麻牛路郎川柳講座は四日十八日午後二時▼有恒倶樂部川柳講座は十四日午後五時開講▼大阪警察病院川柳會は十五日午後五時天下茶屋井上邸で開催▼阪急產報川柳會は午後六時から阪急產報會館階上で開催▼尼崎住友產報川柳會は十三日午後七時▼大阪鐵信病院川柳會は十六日午後四時▼柳生會句會は九日午後五時半大寶町會事務所階上・廿九日午後五時半不朽洞で開催▼川・雛堺支部句會は日午後六時半角堂居に於て開く▼川・雛花園支部句會が十七日夜木阿彌居に開催▼北安白樺川柳會では五月二十三日に創立三周年記念句會を開催される

消息

▼麻牛路郎師は不朽洞會員の德永雅美、仲本玄同子兩氏を同伴、四月十七日吉野へ▼新京の大島滿明氏（客員）が、紋太、素牛兩氏と共に來社時間の餘裕がないとのことで、驛まで見送りながら歡談▼信時潔氏（東京）は「中國樂界の現狀」を朝日新聞に寄稿せられた▼武部香林氏（不朽洞會員）は商用で四國へ出張、多度津桃陵から句信を寄せられた「一太郎やあいへ櫻散り止まず」▼下關の冬田市冬樓氏（不朽洞會員）は五月の本社主催海軍慰問句會に出席される豫定であつたが、絕對安靜を要する病氣のため來阪を中止された▼加川泉泡氏（不朽洞會員）は一日から社用で長崎へ出張される由▼飯田之男氏（下關）は急性肺炎で一時危篤狀態であつたが漸く手紙が書ける程度に恢復された由▼安井ひろし氏（徐州）は文化協會の仕事で南京へ出張、四月廿三日には北京の文化協會へ出張されるとのこと▼經十省二氏（朝鮮）から「四月一日から斷然炬燵廢止でやすむ。ところが夜中かなり冷え眠られずるのみか宿阿の毀作となり二度頓服。朝肩がこつてならず直に入浴。されど氣力丈けは回復、米英何んぞ恐れむ也。終日モンペをはき居り候（未だ國民服を製らず今夏はと思ふ洋服なるもの好みに適せず）モンペの語源文獻上から知り度く候」云々の通信があつた▼中島織州氏（鳥取）は三月廿六日來社夜、新町莊で主幹と歡談▼濱田久米雄氏（不朽洞會員）は四月八日德島縣池田町へ出張▼臺灣唯一の柳誌「國姓爺」が同人制を廢止した

慶弔

▼逸見灯竿氏（不朽洞會員）は三月三十一日附で岡山縣阿哲郡矢神國民學校長に榮轉された▼中島生々庵氏（不朽洞會員）は四月十七日三男孝之君を儲けられた、お慶び申上げる▼飯尾害眞史氏（不朽洞會員）は四月廿五日芽出度華燭の典を擧げられた▼橋詰東雀氏（不朽洞會員）は長男を儲けられ榮樹君と命名された▼石崎洗塵氏母堂四月十四日永眠せられた。謹んで悼む



轉居

▼中原銑人氏（不朽洞會員）は大阪市住吉區帝塚山中五丁目二二楠園へ

院長 醫學博士 井尻辰之助
泌尿器科
皮膚科
華陽堂病院
大阪市南區千年町（南警察署横）
電話南㊺四四七五・二一八五番

▼逸見灯竿氏（不朽洞會員）は岡山縣阿哲郡矢神村教員住宅へ▼中西彌生氏は奈良縣吉野郡黒淵村大字聖飯谷へ▼西島〇丸氏は東京市四谷區若葉二丁目九番地と變更▼石川一夢氏は大阪市西成區柳通三丁目十二番地へ▼飯尾害眞史氏（不朽洞會員）は尼崎市栗山三八〇住友住宅二二號へ▼不朽洞出版部は大阪市住吉區万代西五丁目二五番地へ

× 二十二區制による區名變更の諸氏（一）

阿倍野區（木下幽王氏・大阪鐵道病院・高醫弦能氏・長野晴濱氏・井上湧三氏・藤村雅光氏・須崎豆秋氏・菊澤小松園氏・篠山等彦氏）

東住吉區（橋本綠雨氏・橋本美奈子氏・仲本玄同子氏）

南區（魚住滿潮氏）

城東區（河野夜王氏・淺野久人氏・大西秀三郎氏）

天王寺區（谷谷勇一郎氏）

★社の回覽板

▼不朽洞會新會員發表

大阪 仲本玄同子氏（湧三氏紹介）

西宮 加川 泉泡氏（鮎美氏紹介）

大阪 井上登志緒氏（安邊氏紹介）

府下 巽 無一物氏（沒食享子氏紹介）

同 西野 一望氏（沒食享子氏紹介）

▼井上湧三氏（星下部へ推薦）

▼下記の諸氏は家事の都合上退會された。

川出美根子氏、田中鳳葉氏、小畑自有浪氏、池水湖心氏

▼西宮支部新設、仁多支部解消

新會員を募る

松坂倶樂部 川柳講座

▼戰時生活下の常識として川柳を知りたい人▼人間陶冶の詩として川柳を創作したい人▼從來作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋（日本橋筋三）の七階にある松坂倶樂部の麻牛路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後二時から新形式によつて開講（作句・添削批評講義等）會費一ヶ月一圓。入會希望者は七階の倶樂部受付へ申込まれたい。

（川柳講座幹事）

同・舟・近・詠

松山　前田五健

寫生する　うしろに　邪魔な　許嫁

三女館出高女へ入學

瀬を越した子へ　お茶うまき　一家内
火の　文化　鐵の　文化　と　油服
席譲る　子を兵隊さんは　膝にのせ
米、英は持ち駒無駄に打つて敗け
莨麻育つ　眞上を今日も　皇軍機

金澤　安川久留美

榮轉をしても益々　歩く　主義
梅さくら　藤の頃から　ヒステリー
新學期　ボロ〳〵服も　勇ましき
狂犬を　殘したまんま　支那へ行き
糊口　つなぐに　まづい　小說かな
高い　酒　社務所一升　隅に　置き
小使　の　くせに立派な　腕時計
切符など　背ナの子供は　承知せず
リヤカーを　押すは社員の　日曜日
ゴム靴が　空巣覗ひに　恰度　よし
山吹が　咲いた婆さん　生きてるか
トン〳〵と　畫を踊つて　憎まれる
墓參など　偽善にもつて來いの記事
大臣に　成れず會長　三つ　持ち
けなけにも　入學出來ぬ　日の覺悟

次女萬女へ入學

朝鮮　池田可宵

入學の　通知本人　どこへ行た

「柳友令息入營」

聖恩の　萬分の一　こゝにあり

兵庫縣綱影町　長崎柳秀

殘置燈　消すを忘れた　やうに見え
ひとり身を　案じて　吳れる　隣組
歩く子と　歩いて愉し　春の野路
異議なしの　聲はあたりへ氣を遣ひ
迷彩を　すれど工場は　工場なり
慰問品　まかされて居て　困るなり
友機　追ふ　探照燈の　美しさ
警報に　整然部署に　つくモンペ

三池炭礦　田川市　尼　綠之助

見學を　すまなく戰士へ　擧手の禮

別府近き車中にて（二句）

轉送の傷病兵に　別府　凪ぎ
大分いゝ　傷痍別府へ　着いた　足

奈良縣　嶋田翠峯

假名文字をさらりと捨てた決戰下
隣り組　またも子供の　出來た聲

澤北　高峰柳兒

散る花の　赤さが朝の　眼にしみる
椰子の葉へスコール派手に鳴渡り

福井縣　村田眉丈

狙はれる　本土と見えぬ　春霞
指の節　指環　献じてから　五年
歡送の　軍歌に一人　テナーゐる
ねんねこの天鵞絨の襟なつかしむ
丙午事變前なら　ふしあはせ
默禱に　まつけの長い　未亡人
午前午後　明治生れの　頑なに
逝く春を　即日歸鄕門を閉ぢ

廻轉椅子

★輝く海軍記念日が目睫の間に迫つて居りますので、本號を海軍慰問號とし、不朽洞會員、川雜各支部並びに有志の方々に、慰問誌の寄贈方をお願ひした。寄贈參加諸氏の御厚意を深謝する。

★本號を海軍慰問號としたが餅屋に餅の話をしても詰らぬので、海軍に關する記事はつとめて避けた。しかしお互ひが海軍に關する認識を深めるために、刺身のツマほど、海軍の匂ひをとり入れることにした。そして五月五日に「海軍慰問句會」を開き、その記事のスペースをあけて置いて特に本號へ組込む事にした。

★表紙は海軍の猛訓練を表象した「月月火水木金金」のポスターを利用、撮影は福田妄夢氏を煩はした。

★雜文欄は例によつて、世界的旅行者西川書美氏の手記「小石を集めて」、醫學博士淺田一氏の「語源覺書」、某社重役小山文三氏の「丹波の餅を語る」の續稿に加ふるに、比島に於ける○○兵團の報導班蝶野喜代松氏の「比島物信」、夷一笑の戲作「大東亞ない〳〵づくし」をもつて埋めた。各種各態の好讀物で戰時下の又してもひからびやうとする心の糧とすることとした。そして「丹波の餅を語る」は次號を以て完結するので更に稿を改めて興味多き讀物を提供せられることと思ふ。

★拙稿「川柳の近畿・大和篇」は本號から史蹟の多い吉野方面に就て執筆。

★「Z旗の話」は大阪地方海軍人事部に現家海軍中尉を訪ねての記述で私同樣に海軍に關する智識の薄い人たちへの啓蒙記事である。

★「漫筆銃後の匂ひ」の續稿を本號に掲げた。これは戰線の人たちへの慰問が主眼なので、時間のゆるす限りつとめて毎號執筆したいと思つてゐる。

★戸田孤蓬氏の「川柳世界史」、拙稿の「初等川柳講座」の續稿は誌面の都合で次號へ割愛した。諒とされたい。

★一路集で選稿發表の遲れてゐた柳路氏選の「旅」と、清明氏選の「大陸」を本號に掲げて、その責を果すことが出來た。

★本誌の編輯長として拙身、二箇年餘の努力を惜しまなかつた麻生アートが××のため離脱したので、近く編輯部を改組强化し、職域完遂の實を擧げることとした。

★公私各方面から多數御通信をいただいてゐながら、原稿執筆の間は全然返信すら差し上げる餘暇がなく、非禮を繰り返へしてゐることをお詫びする。これは編輯部の改組によつて、今後少しゆとりが得られることと思ふので今暫くお目こぼしを乞ふ。（路郎生）

化膿症に
アルバジル錠
20錠 50錠 10錠

各地柳壇

花地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規
▼用紙は原稿用 ▼カ字を正確 ▼題目日時及場所記入 ▼締切は毎月廿五日 ▼却稿は本社所有

本社主催 南方動物川柳會（大阪）

四月十一日於市立天王寺動物園

本號二二頁の記事參照、たほ兼題「象」路郎選、「蛇」綠雨選「鰐」豆秋選は同頁に發表

兼題「猿」　紫香選

南方の猿にもあつた母性愛　葉光
猿へ來て身しろぎもせず男の子　惠美須
密林を突く神兵は猿もつれ　良夫
兵隊の膝でモンキー夢を見る　潮花
勇士等は肩のお猿も寫される　茂
歷史を造る兵隊さんは猿を倒ひ　水客
猿の目に人間いたづら者に見え　瀟潮
サボッタ日猿の遊ぶを見て顰り　妄夢
餌を出す手猿警戒を忘らず　默平
心得て猿はお手々を出しに來る　拓郎
日輪はたのし千年猿は涙を越え　鮎美
園長の前でも猿は蚤をとり　幽王
逃げのびて猿はみかんの皮をむき　豆秋
頬冠り猿心得た歩きぶり　水客
一つだけ離れた猿は頭掻き　紫香
春うらゝ猿いそがしく蚤をとり　房一
ひひ猿は威張りちらして歩くなり　豆秋

兼題「麒麟」　鮎美選

肩車キリンへやつと餌かとどき　葉光
お二階へいきなり麒麟顔を出し　不二
春の風麒麟の首に柔かし　勢三
麒麟の眼南は花の絶間なし　青路
ゆらゝと麒麟の影が動いて來　紫香
諦めたやうに麒麟は立つて居り　綠葉
餌の要らぬ顔で麒麟の歩きやう　香林
銘仙を着てゐる樣にキリンゐる　東雀
迷ひ子を導く見てゐるキリンの目　豆秋
瀟開へ麒麟の首は延び切つて　同
ふと麒麟導くの方をふりかへり　紫香
陽は靜か博士キリンへ話しかけ　鮎美

席題「社長」　默平選

ゲートルが一寸はどけてゐる社長　瀟潮
增產へうちの社長も卷脚絆　惠美須
興味たゞけ何んにもなくて社長老け　登志緒
陣頭指揮社長の脚絆板につき　文雄
小便も社長も同じ飯をたべ　竹莊
國策に添うて社長も電車なり　同
裸から上つた社長開き上手　房一
社長とは親しみ持てぬ人でよい　妄夢
丸刈の社長の部屋の猛虎の軸　鮎美
甲子園に來いと社長の腕つ節　勢三
若き日なぞと社長の機嫌良く　文雄
社長たゞ笑つただけで事がすみ　幽王
陣頭指揮社長の部屋の世界地圖　鮎美
勵まして奥ゐる社長の手のぬくみ　潮花
社長徵用日本の國は捷ち進む　幽王
鍬一つ社長拾つてそつと置き　淡水
ライオンのきげんが悪い櫻どき　豆秋
雜踏へ羊ひつじの聲を出し　水客
ライオンの書寢他愛もたかりけり　一笑

雜川　堺支部句會（堺）

三月廿七日　於波夢造居

戰力に見切をつけた旗を出し　角堂報
戰力增强サア來いと云ふかまへ　詩朗
これも戰力ヒマの種を蒔き　波夢造
會議また會議で米英の忙しく　豆秋
米英へモンペの意氣見せたいな　角堂
設論して巡査派覆迄出してやり　豆秋
夏服も巡査の服を見て着換へ　詩朗
バスを待つ列に巡査も交つてる　竹葉
戸口調査收入迄も書いて行き　豆秋
テレ臭そうに巡査股火から離れ　英二
鍬持つて巡査模範を示してる　波夢造
盛り場でアナウンサーになる巡査　角堂
トランクを巡査横目で見て過ごし　竹葉
内祝忘れる頃に持つて來る　詩朗
祝事料理屋から日を定められる　英二
内祝どうやら小豆の重さなり　豆秋
内祝幾何だらうとひねる首　波夢造
内祝小包にして送り出し　竹葉
内祝又病み始めから話し　波夢造

雜川　下關支部句會（下關）

二月十三日　於市多樓居

信號の赤に厄年ふと思ひ　牛休報
狙で鰻SOSとはね　市多樓
自爆する信號强く響くなり　鯛好坊
指導者を質問攻のモンペ隊　同
身を以て指導する氣のナッパ服　十字星
早起の指導朝顔數へさせ　米三
犬死はすなと書き足す親心　秋無草
振り上げて投て何處打たう親心　井蛙
經濟戰もう日本は持てる國　鯛好坊
晩酌を止める氣子等の枕數　市多樓
長期戰今夜もお茶か呑めて無事　九呂平
長期戰三番目のもお召待ち　同
長期戰ひざのつぎ目も多くなり　市多樓
長期戰モンペ姿も板につき　精花
實力があつて貧乏な子澤山　同
　　牛休

雜川　三池染料支部句會（大牟田）

三月廿九日　於早鐘講堂

これつぽー兵隊さんに負けまいぞ　蝶人報
行きずれの兵にとりたい暴手の禮　國夫
演習へ一家總出の握り飯　一葉
大捷へ兵に感謝の神酒を汲み　梅春
東亞展兵士の苦勞思ひやり　一葉
前線のおかげ銃後は日本晴　末男
潮見舞モンペ揃ひでよろこばれ　鶴水
モンペを氣嫌ねた昔笑ひ合ひ　抱逸
野草摘みモンペの伯母も交つてゐ　路村
產盛は受話器の中で聞かされ　藤樓
產盛へもう兵隊にする積り　梅春
寢呆助へ母もかけ値の時で呼び　三千樓
太陽へ濟まぬ寢呆の顔で來る　梅春
寢呆助の遲刻ベタルのせいにする　鶴水
征く友は男としての語を殘し　抱逸
廿一我は男だ海に生く　世志一
男なり太平洋で散る覺悟　平人
　　世志一

雜川　神津支部句會（大阪）

三月十四日　於て平居

櫻咲ゝ日本で捕虜の仕合せな　香林報
春陽射し御破算の指一寸止め　良夫
卷脚絆もうオーバーが重た過ぎ　天之雀
藥を打つ音も春です自作農　七郎
增產の戰士春など忘れてゐ　蜂郎
軍事便櫻のことも訊いて來る　紫峰
銀鼠ものどかに見える春霞　鶴泉
飾り窓心憎くも春の色　若葉女
　　同

九段坂亡き父も知る春衣にて　晩浦
つく土筆摘み貧けた父酒にする　伊太古
花の道モンペ斜に運り抜け　乙平
春や春僕にも戀が出來そうな　不二
戰盲の身に春風を感じたり　同
心して踏むまじ春の草の花　風情
統制の世に依然たりはこべ萠ゆ　アート
忙しさをのがれて春の水の音　香林
民主主義慾の一字で行つまり　晴坊
乘り換を巧みに使ふ都會人　同
値に惚れた債券藪は　とうに潰み　伊太古
もう一戰させたかつたと親の慾　同
また慾を殘し闇取まけを切り　風情
女房の慾は半日寢て見たい　乙平
傳さや死出裝束に六文錢　同
强慾と云はれて子等の爲に貯め　嶺泉
社長室きたない慾を見透かされ　香林
贅澤な慾だと知つた夜業の灯　アート
これも慾の内かと思ひ風に立つ　同
内證金何時の間にやら消えてをり　青洞
内證で買つた債券くじ當り　乙平

川雜

出雲支部句會（出雲）

三月十七日　於さわだ居　綠之助報

姉樣の畑はいつも花ばかり　かほる
一振り二振り俺の畑が延びて行く　研路
打ち返す畑に春の息吹聞く　土筆
畑打つ素足にふれる土も春　水馬
增産に一役買つた花畑　悅邦
轉業に惜しい畑を捨てゝ行く　さわだ
新戰場畑も出來たとの便り　同
里歸り畑で愚痴も聞いてやる　研路
開墾の畑殘して榮轉し　紅綠
お隣りの畑に競ふ葱の色　しげる
門札も氣性と同じ走り書き　伸郎
門札へ二人がゝりの若夫婦　八雲
轉業者門札もかへ明るい日　英一
郵便も雜號で通る書家の門　研路
水金を笑つて受ける白樺　慶坊
祖國よさらばドラが鳴るドラが鳴る　壽年
村界でお召の馬を送る朝　綠之助
別離傷心男と起てと云ふ戰果　同
青春の希望南の國にあり　梅刀
開拓の朝晴れ東方遙拜す　研路
開拓の思ひ出となる葱の出來　綠之助
青空よ小さい世界に俺は居た　綠之助
寢ころんで居ては勿體ない旗日　八雲
遙かなる山の家なり日章旗　さわだ
爆煙の中からはつきり信號旗　綠之助
公休日工員夫婦の大掃除　しげる
目が醒めて見れば公休晝下り　さわだ
公休日今日は朝寢をする氣なり　八雲

川雜

花園支部句會（大阪）

三月二十日　於阿彌居　妄夢報

當りさうなと債券を買ふ新世帶　伊太古
空瓶が一本欲しい新世帶　豆秋
新妻へ垢切れ藥買うてくる　妄夢
湯をこぼしすぐぶいてある二階借　茂
二階借りうつぶん晴すか詩を吟じ　妄夢
拾圓をくすしに降りる二階借り　滿潮
二階借り下の話が氣にかゝり　木阿彌
轉業へ何はなく共この力　東雀
この力産業戰士を意識する　義坊
力だけやつて來ますと梅田驛　甚太
闇還して大きな力瘤を見せ　登志緒
喇叭吹く力少年の頰赤し　葉光
終電車都會の雨が光るなり　豆秋
雜踏は春の彼岸の市電から　一笑
急行は鶴橋町から歩かされ　木阿彌
四ッ橋のパンの匂ひがする市電　豆秋
お上りさん端から端まで乘りたがり　薰風
自轉車で市電の事故を見て通り　葉光
黑焼を見ながら市電待つてゐる　豆秋
サラリマンの悲哀築港行が來す　滿潮
天才のまた獨身であまんじる　洋々
天才がほかの子供と氣があはず　夫美子
處女のまゝ天才四十を越して行き　拓郎
二十日目の風呂を天才ながされ　滿潮
常會で早びけをする女戸主　一笑
又損をしかけて女戸主あわて　同
稅務署へ乘り込んで行く女戸主　豆秋
女戸主にしてはあんまり若すぎる　東雀
實印を捺して淋しい女戸主　滿潮
死ぬだけをもうまつてゐる女戸主　英雄
金だけがたよりだと云ふ女戸主　薰風
交際費女主じの氣にふれる　啓一朗

第五回　西日本鐵道川柳人大會

三月七日　於鐵道修養道場　市多樓報　カズヱ

治さねばならぬ氷を碎いてる　不水
生死一如自爆のひとゝき　半休
信念に生きて苦鬪とも云はず　鯛好坊
無學にも信念のある立志傳　カズモ
信念はまけずグループ選ざかり　勇遊
信念を持つてとあつさり敎へられ　久米雄
信念は故郷を出る時から髮へず　春巢
彈は當らぬと云ふ信念を得て歸還　紫香
信念は遺稿の中に育くまれ　達郎
信念かとんがらがつた聲になり　秋史
見る人に任せて僕は僕の道　紫香
勝つ國の日の出交換船かへる　春巢
勝つ國の神棚掃除行屆き　不川
自爆機の笑顏僚機が見て戻り　春巢
死んだ子は淋しい笑ひ顏で撮れ　不川
謙讓の笑顏が記念を間違付かせ　彌助
發車ベル助役が子供抱いて乘せ　春巢
もう會へぬ豫感の人へ發車ベル　紫香
發車ベル夜汽車の夢の中で聞き　秋史
手を耳にして聞きかへす發車ベル　水客
發車ベル派手に握手を求められ　抱邊
發車ベルうつとり聞いて寢臺車　鯛好坊
發車ベルお國訛りもほぐれ　井蛙
萬歲を一度させる發車ベル　不水
ジャガ芋が一つころんだ發車ベル　同
萬歲へ暫く消えた發車ベル　水客
發車ベル母の白髮を眼に殘し　春巢
老母の目が決意を告げる發車ベル　カズヱ
再會の友肩書がある名刺　春巢
再會は見覺えのある帶を締め　水客
遺兒部隊父に會ふ日の夜汽車に　彌助
若櫻また會ふことは言はず征き　不川
再會の義手へ煙草の火を分ち　カズヱ
再會を約し名刺へ地圖を書き　達郎
貯金箱溜つたなあと振つて見る　終始
德利に別れを告げて貯金箱　水客
貯金箱一家は無事な灯に坐り　紫香
貯金箱母も時々入れてやり　春巢
銅貨獻納こわ開けられた貯金箱　淺一
勝つ迄は欲しがりませぬ貯金箱　抱邊
債券のたしに貯金の蓋を開け　春巢
軍務公用を待つ身行先云うて出る　茶目坊
公用の旅の朝の麥の飯　九呂平
公用に地味なネクタイ掛けて出る　久米雄
公用で來て落ち付かぬ飯の味　水客
公用を濟ませ墓參の道へくる　抱邊
公用外出看護師を横目に通り抜け　俗善蘭
印章一ッ貰ひ公用それで濟み　同
公用のためと素通りした端書　蘇堂
公用の車と知れる幌の艶　望月
腰拔を歸還の勇士物語り　蘇堂
物語り次の頁へ五年經ち　春巢
出世物語り出世もらくだなと思ひ　蘇堂
記憶から掘り出す樣に物語り　米三
小國民にビルマルートを敎へられ　久米雄
沖荒れる濱に漁師は下駄で立ち　俗善蘭
大平洋大日本を賭ける場所　彌助
お魚は無限の海を舞臺にし　三岳

勝ち進む 海造船も負けて居ず　不川
海行かば 自給自足の國が出來　牛休
砲煙の あとは日の丸 だけの海　井蛙
海ゆかば それ日本の 委なり　鯛好坊
海はるか ガタルカナルの 兵隠ふ　久米雄
決戰の 日となる 太平洋の 波　同
温泉の 効能書を 見て 入り　久米雄
どの顔も 皺が伸びてる 湯の香り　秋史
傳說もあつて山の湯 面白し　秋史
温泉の きゝめ信して 目をつむり　春路
初旅は 乘換驛が 氣にかゝり　喜樂
海底を 乘替へもなく 夢で行き　米三
入學の 日の靴下が もう破れ　米三
入學を 連れる母親 嬉しそう　水客
入學の 喜びも 書く 慰問文　春路
入學の 委見せたい 一週忌　抱逸
入學の 子だけの 膳に 小さい鯛　秋史
スタートはもう切つてゐる入學日　鯛好坊
立膝の 素顔へ出前 とどけられ　俗菩薩
立膝で 拂ふ女の 金ばなれ　米三
立膝へ 風が 靜かな 鏡掛け　水客
人の列 犬も見てゐる 紙芝居　茶目坊
姉ちゃんは 只で見て居る 紙芝居　俗菩薩
淨瑠璃の 下地もあつて 紙芝居　鯛好坊
紙芝居 次の豫告も して 歸り　秋史
軍神の 母紙芝居でも 泣かせ　游記

阪大川柳會（大阪）

三月二十四日　利生報

街路樹の 下で豆炭 おこつてる　正甫
豆炭を 男が 攝む 不倖　春巢
腹の立つ 日の豆炭が よく匂ひ　同
結局は 後から強かり 言はしてる　正甫
相槌を 打たれ強かり 悅に入り　柳秀
強がりを 云つて上役 黑持たず　正甫
慾敗をこりずラヂオで 力んで居　柳秀
強かりが 過ぎて敷居が 高くなり　正生
親の影 見てから急に 強くなり　同
英米の 誇る強さは 數のこと　柳秀
強かりを女房ひや〳〵 聞いてゐる　春巢
友人に 辯護士かあり 強く出る　同
マンゴーに 椰子に 飽いたと 軍事便　柳秀
人違ひされた話を 自慢にし　春巢
歌舞伎座で 肩をたゝいた 人違ひ　青一路
追ひ越したとこで氣のつく人違ひ　柳秀
お人違ひでせうと仲居の素氣なし　葉
人違ひが 芝居となつた 與市兵衛　正甫
人違ひ 帽子を脫げば 禿けてゐる　葉
髭立てゝ見知らぬ人にお辭儀され　春巢
人違ひ されて居るなと 兄思ひ　柳秀
警察で 同名異人だと 分り　春巢
人違ひそれからバスのおそいこと　葉
何遍も 禮を云はれた 人違ひ　路郎
醫博ですそうですといふ 人違ひ　同
弟さんと 知らず女將は 聲を掛け　同
人違ひ でせうと女の 太々し　同
人違ひ したのか 金は 要りません　同

松坂倶樂部川柳會

三月十四日　白面人報

手心が いけなかつたと 父の愚痴　伊太古
朗らかな ものさ手心 とも知らず　生々庵
手心もなくまた弟子をたんと持ち　不二
手心の 角力へ 伜承知せず　妄夢
手心も せずに兄弟子 稽古つけ　同
上戸への 嬉しいお鶴れ 松の内　寒浪
增產の 戰士へ酒の 煙草のと　同
孫の手相 もう御自慢の 宮詣り　翠光
みてほしいことにはふれて來ぬ手相　同
手相から いけば 然春 課長なり　不二
手相觀は うなつく迄は 離さない　聖司
手相觀の 戰友が 居る 大休止　妄夢
みてもろてよかつた手相信じ切り　翠光
客の觀る手相に女給じよさいない　好郎
まだ生れますかと手相に念を押し　生々庵
下ごゝろある手ごゝろへ親しめず　翠光
手心の あてがわかつた 淋しい日　同
偉い人 いつのまにやら 無罪です　好郎
常連へ チト重そうな 銚子ゆく　同
若先生 氣絕さす程 投げ飛ばし　聖司
節電へオッチョコチョイがつまづいた　美奈子
節電へ 用のない者 ねかされる　同

四月四日

防空問題に ブラスリーフも 一寸鶴れ　妄夢
訓練に 遠慮したのか 櫻まだ　好郎
防空は 迷子の札を 胸に付け　寒浪
春の陽を きれいに受けた 哨戒機　翠光
モンペイに よそ行きもある 銃後なり　寒浪
用水は 先代からの あふれやう　不二
雨降りに なつて防空 ひと休み　聖司
火叩は オモチャにしない 男の子　不二
ポスターに 描くモンペイの板につき　孤蓬
うたゝねを 起すも妻は 子を使ひ　寒浪
轉寢へ 歩哨を立てた 大休止　翠光
轉寢の まくら警報へはね 飛ばし　乙平
轉寢へ ナント小癪な 蠅二匹　好郎
うたゝねへ電話しきりに 鳴つてをり　東雀
賛成と 云つてうたゝね 先に立ち　聖司
考へが 出す轉寢を してしまひ　香林
轉寢の 座敷が 廣い 女戸主　同
午前二時 うたゝね獸つて 寢間着きる　孤蓬

ロッパ劇を句材として（二月廿一日）

花の行進曲

結婚解消 ぷふんと笑つて 頂戴な　生々庵
ララララも 話せば親父 分るなり　寒浪

交換船

お役に立つ日笑つて死ぬ日を蓋合。　生々庵
日本が 勝つてる夕刊 泣いて讀み　同
交換船 我々の云ふ事 ロッパ云ひ　聖司
監視の眼 さけて開戰 祝し合ひ　形水
檢閱は 林檎にまでも メスを入れ　同
穢されし 物は食はない 日本人　同
銃劍に 親子の別離 さへぎられ　同
「交換船」野村大使も 端役なり　好郎
唐待が 何の祖國の 勝戰　翠光
おゝ見えた來たぞ見えたぞ淺間丸　同
ヤンキーをもつと毆つて欲しかつた　妄夢
勝つてゐるだなゝ〳〵收容所の涙　博也
米兵の 台詞分らぬまゝに聞き　寒浪
壁に耳 あてゝ戰果を 信じ切り　香林
交換船 野崎の骨を さし上げる　同

猿飛佐助

猿飛の 呪文の間 敵も待ち　好郎
猿飛佐助 僕にも演れる 芝居なり　寒浪
猿飛の 夢タンポポが 亂舞する　不二

新加入の女優君へ

少女歌劇と云ふ 殼凡つぼにつ　生々庵

有恒川柳會

三月廿五日　銳々報

私學出は 課長代理で 首になり　行三
代理店になつて 歡迎されてゐる　同
會葬へ 社長代理は 反り身なり　青美
防空へ 今日も代理の 女中來る　同
延滯へ また妻君を 寄越しよる　同
物言はぬ代理もまじる 通夜更けて　青美
重役の 手帳歌舞伎の 日も書かれ　銳々
手帳裂いた 走り書 女不服也　同

四月十四日

組合長國民服で 上京し　行三
大臣も會うてくれたと 理事の會　青美
上京に 娘へ野菜 ことづかり　同
東京の 宿へワイシャツ 殘して來　銳々
上京の 夫人銀座を 歩く用　同
廊下無し 戰時體制の 家が 建ち　行三
工場の 廊下の屋根も 献納し　同
アパートの 廊下で遇へば 腰低し　銳々

月光と花びらを踏む廊下也　同
立たされた廊下も見て征く海の猛者　青美
個人展廊下の額は見落され　同
陳情は廊下で既にくの字也　同

大阪警察病院川柳會（大阪）

二月廿三日　正柳報

春風を背廣にはらむ心地よさ　白路
背廣着てナーおつさんと云つて居り　樂柳
スフ入りの背廣てんたに着たいのか　浩
徴用工想ひは遠くガダルカナルへ　樂柳
徴用は彈がこんので ものたらず　青柳
をかしいと見れば左は義眼だよ　雨聲
左褄今日はモンペの奉仕隊　正柳
肋骨があはや折れそなラッシュなり　同
ほんとうにまた來てねえと兵もてる　同
女丈夫の亭主手雑のやうにみる　久郎

大阪遞信病院川柳會（大阪）

三月十六日　於圖書室　波食子報

手心があつて組長にくまれる　卓二
手こゝろを頼むと電話かゝつて來　榮實
未曾有の戰櫻よ派手に咲け　喜由
いゝ委羽織の紐を弄び　竹莊
二本目は手こゝろだつせと仲居言ひ　方正
金絲銀絲ものに憑れた委にて　同
色眼鏡委を覗へたつもりなり　同
着膨れの委にあらじ二十歳過ぎ　同
手こゝろへ綿清警察目がひかり　同
櫻とも云はず銃後へ夏が來る　波食子
戰線の方が櫻を戀しがり　同
手こゝろをはがゆがつてる第三者　同

艸生會川柳會

三月十日　於驛木旅館　是牛報

約束の果せぬ戀を苦しがり　隔山
お母ちゃん嘘おつしやいと子ども　同
御隠居がまだだまされて鷹擧賣ひ　同
盗賊市瀬戸物にまで明時代　同
妻だますすべも覺えて三十路過ぎ　同
鳥見靈社こちらは嘘だと蒐出びいき　是牛
一つ宛嘘の減りゆく戀同志　同
履歴書は取捨選擇で書き並べ　同
大根役者嘘で死ぬのに一苦勞　同
被告より嘘の上手な名檢事　卑之介
イゝ月夜羞かしくなり嘘言へず　同
給料の足りないだけは嘘で埋め　同
椰子の木も支那兵もみる撮影所　同
人柄にまさか嘘とは思はれず　多加史
嘘と嘘とがテーブルに睦じく　同
鼻の上に汗までかいて通す嘘　同
行軍價嘘の部數の上に出來　同
嘘の美をつくる化粧の眞劍さ　同
パッタリと會ひ缺勤の理由ばれ　同
紅赤々と嘘つきそうなおロもと　同
悪友の名を宿帳に書いておき　同

千石莊川柳會

三月二十五日　於娯樂室　無一物報

メガホンが入らぬ地聲で警護班　莊兒
明朝散ると決めて兵等の高いびき　健太郎
面會の父をしつかた春陽へ透かす　年男
看護婦さん逝く
咲かずしてたゞ一人なる旅に出で　三九三
憧れてゐる女に一寸度胸見せ　裏之助
お酒落だけあつて恰好の良いモンペ　次郎
賞院の理髮室
理髮室だけは浮世の風が吹き　影法師
數の本父は手を貸し足を貸し　健次郎
父と子が軍歌を唄ふ風呂歸り　堅一
子澤山父も子供を抱いてゐる　清
餅燒ける匂ひ二階で病んでゐる　辻五郎
姉七人女の着物も着せられる　粗粒子
この子がと世間の手前子を叱り　久雄
獨身者手工する樣に針を持ち　登志
父戰死の報に接し
もう一度あゝもこうもと思ふ愚痴　茂
長患ひ好きな着物が派手になり　壽美子
ズボンまで夫妻共用共稼ぎ　俊子
歸還兵參謀のやうな口をきゝ　忠四郎
父ちゃんと呼ばせて電話用が足り　福壽草
幹候に通つてやつと初便り　枕流
麥の芽はこれ位かと病んでゐる　貫一
殊勲甲默つてたてた男ぶり　松樹
山下パーシバル會見
結極は度胸に呑まれ無條件　珍聲
自爆する度胸に敵は割り切れず　一雄
叱られる度胸を決めて降りてゆき　興龜子

若鮎句會

二月二十五日　泉泡報

進水だ船も決死の波を蹴る　泉泡
處女航路乘組員の顔も晴れ　英三
決死隊舟艇もろともまつしぐら　光洋
雨から運貨だけの砂糖が來る　泉泡
船腹は眞心うちし鋲の數　礎石
戰友の遺骨に白き船が着き　櫻城
三月二十五日
便り來て唯友情に涙する　隆興
友情のキザミラマ塔つゝむなり　泉泡
そうさくに友を呼びしもこだまのみ　正二郎
新聞へ母は戰地の子を想ひ　松綠
新聞を肩越しに讀む大戰果　三葉
軍神にカツ入れられた獨り者　礎石
獨り身の夢母の手があれて居る　泉泡
雨から故郷へ便り八月振り　愛
還らじと祖國拜みて驛ち進み　一笑
何時までも變らず故郷待つており　梅香
故郷よ永久に榮へ俺は征く　帆休
野に山に脱ぎ捨てられた冬衣　紋平
献納機驛ちてし止まむ血を捧げ　翠柳
敵彈の中で悟りの道開け　默雷
今日も亦勝とり職場の朝が明け　義朗

もしほ川柳會（廣島縣）

二月十一日　於蟻蜂寓居　翠柳報

首卷を片手に提げた急ぎ足　蟻蜂
公報に泣かず遺品にむせぶ母　雅風
功成つて過去の苦勞を夢にみる　凡々子
三月十四日
功成らぬ瞼へ故郷の母浮かぶ　思惑

非特異性全免疫元
オムニコ
トメツ
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症抜粋）
流感、各種肺炎、肋（膜）膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、產褥熱、其他各科、急性、慢性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格廉賤。
（包装）
一文試驗量
118錠入　118錠入
118錠入　118錠入
118錠入　118錠入
發賣元　株式會社黒田藥品商會
大阪・東京

社關係の人々

主幹

麻生路郎

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本卯之助　頴原退藏　浅田一　末弘嚴太郎

客員

島山一歩　沖野岩三郎　大島蕭明　大谷五花村　川村花菱　井晟修　米村あん馬　田村孝之介

谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚

不朽洞會員

橋本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井鋭々　大西八歩　高澤一浪　戸田孤蓬　石井白面人　中島生々庵　戸倉曹天　古川風竹　前山北海　古川麗花麗

岩崎山石　藤井友郎　米本貫志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢遣　藤岡至藝瑠　西川青美　米本儀助　吉田萬雷　井上湧三　仲本玄同子

★

村松夢裡　市場没食子　吉田水車　妹尾八九濃　須崎豆秋　宮岡白峰　石曾根民郎　高田抱遥　月原宵明　中村墨王　福下妄夢　橋詰東雀　吉田木阿彌　谷川琴水　加水泉泡　井上登志緒　無一物

布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾栞　櫻川不水　中原銑人　濱田久米雄　河田一將　上田翠光　武部香林　谷口綠葉　明石竹莊　水谷竹柳次　長野井蛙　村上角堂　福井船哲　松浦帆　小川靜觀堂　田邊由布　宮田不二　岡島嶺泉　乙谷乙平　伊古田伊太古

小川恒明　野口柳太　浪玲之介　河野夜王　德永雅美　小林文月　酒井美知夫　飯尾寄與史

鈴木九坡　夷木一鹿笑　鈴原宵明　遥見灯竿　植山九天　篠山籌彦　國弘牛休　岩崎萬的虹　阿部芙蓉　正本水客　黒川紫香　原史風　中西おさむ　石曾根民郎　高田抱遥　月原宵明　鈴木一鹿笑　夷木一鹿笑

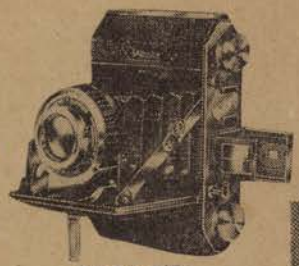
ガラス壜代用 紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市阿部野區晴明通一丁目四〇番地
二葉屋商店
電話事務所用　天下茶屋（五八〇二）五八〇〇三番
工場用　同　五八〇〇四番

セミ・ミノルタ
代表的國産カメラ



ブロニー
16枚撮り

II型F4.5付
¥117.00

F3.5付
¥141.00

距離計
¥21.00

（カタログ呈 要郵券十錢）

淺沼商會大阪支店
大阪市南區順慶町四丁目
電話船場905・1905・1396・5095番

麻生路郎著
新川柳評釋
定價〒〇・八〇 〇・八八
本篇の川柳で一枚選りの名句を篤め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。

藤村誠一著・序文　麻生路郎・百田宗治
隨想集
詩人複眼
定價〒一・〇〇 〇・〇八
川柳眼で書かれた隨想集。その大半は高篤郎氏のペンネームで「川柳雜誌」に發表されたもの。

麻生路郎著・柴谷宰舟畫
累卵の遊び
定價〒一・〇〇 一・一六
名句に名評釋がしてあり、類例となる句が澤山篤めてある。漫畫三十二葉挿入。

戸田孤篷著・麻生路郎序
柳川
二千六百年史
定價〒〇・九〇 〇・〇八
著者一人の創作・詠史川柳の尖鋒をゆく。

街の雜音（實切）　大空（實切）　人の一代（實切）

大阪市住吉區萬代西五丁目二ノ五
發行所　不朽洞
振替大阪三〇三九二番

安産のために
姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀬醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

樹林醫學博士
片瀬醫學博士　推奨　監査

ワダカルシューム錠
大阪道修町　和田卯助商店

健・民・運・動

★生めよ育てよ　皇國の子供
★健康は生む　一億の底力

——大政翼贊會大阪府支部——

美顔水の威力

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時！

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！　ゼヒお勧したい薬です！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子達のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

東京・大阪

桃谷順天館